

---

# 網ヶ背橋

伊東歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

綱ヶ背橋

### 【Nコード】

N8125L

### 【作者名】

伊東歩

### 【あらすじ】

「満月の夜、手を取り合ってその橋を渡った男女は永遠に結ばれる。」

とある街の小さな伝説。僕たちは伝説通りに橋を渡った。そして数年後、彼女は帰らぬ人となる。それから1年後に現れた少女は、死んだ彼女に瓜二つだった。

## 天使

・  
・  
・  
「祐樹君は綱ヶ背橋の伝説って信じる？」

「え？」

祐樹は不思議な感覚に襲われた。いわゆるデジャヴのような。懐かしく、そして少し悲しい記憶。どうしたの？唯は笑顔を崩さず少しだけ首をかしげた。祐樹はちよつとためらい、やがて意を決したように口を開く。

「つながせばしの伝説？何それ？」

・  
・  
・

「祐君は天使って信じる？」

「てんし？何それ？」

祐樹の答えに優衣はふうとため息をついた。教室の後ろにある各個人用の棚に向かう。『こばやしゆい』のネームテープが貼つてある棚の鞆の中からノートと鉛筆を出してきた。ノートには子犬の写真と「おえかきちょう」の文字が躍っている。祐樹の元まで駆け足で戻って隣に先ほどのようにちよこんと座る。ノートを開いた。いたる所にお姫様やうさぎ、花などが彩っている。優衣はまだ何も描かれていないページを開くと祐樹に説明しながら鉛筆を走らせる。

「天使って言うのはね、こんな感じで、羽が生えてて、こんなの」

「あ、僕見たことあるよ。ご飯作るテレビのやつでしょ」

「それはキューピーちゃんでしょ。天使よ、て・ん・し」

祐樹は優衣の描いた天使の絵をまじまじと見ながら首を傾げている。

「天使は神様のお使いなのよ」

「おつかい？弟子みたいな感じ？」

「……ん、うん、それでいいや。めんどくさいし」

「それで何の話だっけ？」

「天使を信じるかって話よ。いると思う？」

優衣の目が輝きだす。ようやく本題に入れるとうきうきしているのだろうか。

「いると思うって……いるじゃん」

祐樹は優衣のノートを指差した。優衣の描いた絵のことを言っているのだ。

「そうじゃなくて、本当につてこと」

「本当かうそかってよく分かんないけど、僕はこの天使しか知らないし。僕には優衣ちゃんの天使が本物だよ。」

優衣は難しそうに顔をしかめていたが、やがてふと口を開いた。

「優衣の天使が本物の天使？」

「うん。優衣ちゃんは僕の天使を描けるんだ。すごいよ、優衣ちゃんだけが本物の天使を描けるんだもん」

祐樹は笑顔で優衣の顔を見る。優衣も笑顔で見返した。

「すごいね、優衣」

「すごいよ。でも」

「でも、何？」

「それで何の話なの？」

「……」

唐橋市立西幼稚園は唐橋市で一番端の高田町にある。唐橋市は都会というには閑散として、田舎というには賑やかな市だ。高田町はその中でもさらに寂しくなく賑やかでもないというなんとも区別しにくい町である。もっぱらそこに住む人間にとってはそんな他人の評価などどうでもいいわけで。西幼稚園の道路を挟んで向かいには同じく市立の唐橋西小学校がある。西幼稚園児たちは卒園するとほぼ100%その小学校に通うことになる。私立に行かせようとする親がいるほど都会でもないので、まずこの統計は間違いない。もち

ろんこれも当人達にとってはどうでもいい話である。

午後3時には西幼稚園は終了、門は次々に園児たちを吐き出していく。

「さようなら、みんな気をつけて帰るのよ」

木村直子先生は笑顔で園児たちに手を振った。さよならー、園児たちも負けじと笑顔で手を振る。

「祐君、何してんの？早く帰ろうよ」

「うん」

祐樹は優衣に手を引かれ教室を後にした。

「先生さよならー！」

人一倍大きな優衣の声が響く。

「はい、さようなら。祐樹君もさようなら」

「さよなら」

祐樹の声は優衣のそれに比べると随分と小さい。直子先生は手を繋いで、というよりはまるで手を引く姉とそれに身をゆだねる弟のような二人を微笑ましく見送った。

「明日は休みね。祐君何するの？」

門を出るなり優衣は早速口を開く。

「え？別にすることないよ」

即答。

「ちよつとは考えてよ」

「あはは。優衣ちゃんは？」

「優衣はねえ、お祖母ちゃんの三回忌っていうのに出るの」

「さんかいき？」

天使の話をしたときの様なきょとした顔で優衣の顔をのぞく祐樹。優衣もそのときと同じようにため息を、つけなかった。代わりにペロツと舌を出す。

「優衣もよく分かんない。お葬式みたいなものなんだって」

祐樹には葬式自体あまり理解できなかった。実際に葬式に参列したこともなければ、まずこの年齢で死というものを理解すること自

体無理といえるかもしれない。

「せっかく祐君と遊ぼうと思ってたのにな」

そう言っただけでふくれっ面をする優衣。そんな優衣の横顔を祐樹は嬉しそうに眺めた。

「何？」

「僕優衣ちゃんのその顔好き」

笑顔で、臆面なくそう言い放つ祐樹に優衣はちよつとはにかんで、そしてまたちよつとむっとする。

「嬉しいけど、笑顔とかじゃなくてこんな顔が好きなの？」

祐樹は顔の横に右手を出し人差し指を立てる。そしてそれをくるくる回しながら誇らしげに言った。

「優衣ちゃんは優しいから皆に笑った顔を見せてあげるんだ。でもこんな顔は僕といるときしか見せないでしょ。僕だけが見れる顔なの」

優衣は喜んでいいのかどうなのか、複雑な表情をし、そしてすぐに笑顔に戻る。西幼稚園から優衣の家までは300mと離れていない。すぐにお別れだ。

「まあいいや。じゃあ月曜日また遊ぼうね」

「うん、ばいばい」

二人は大きく手を振り、そして別れた。

祐樹は他の子たちよりも内気な性格だった。あまりはつきり物事を口にしない、態度に出さない性格は、世話好きの優衣には口を出さずにはいらなかった。4月生まれの優衣に対し祐樹は翌年の3月。約1年の成長の差はこの年齢では顕著だ。そして二人の性格の違い。優衣がまるで姉のように祐樹を構うようになるのは至極当然の流れだったのかもしれない。内気な祐樹は友達を作るのも苦手だった。だからもっぱら一緒に遊ぶのは面倒見のいい優衣とだった。だから優衣と会えない休日はあまり好きではなかった。二人の家には幼稚園児にとっては決して近いとは言えない距離があった。いつも歩いて幼稚園に通っている祐樹には特別遠い距離とは感じなかった。

たが。山に沿う形で曲線状に伸びている道路を一人歩いていると直に家が見えてきた。とは言えそれは自分の家ではなく、

「ただいまー」

「ああ、祐ちゃんお帰り」

いつものように満面の笑みで迎えてくれたのは祐樹の祖母の米子だ。西幼稚園と祐樹の家の中間、と言つてもだいぶ祐樹の家寄りだが、そこに母方の祖母の家はあった。だから祐樹はいつも祖母の家に寄り、母に迎えに来てもらうのだ。祖母は座椅子から立ち上がる

と台所へ向かった。

「手洗つてきなさい」

「はい」

祐樹はその前に母に電話をした。

「お母さん、今ばあちゃんち帰ったから迎えに来てね」

「はいはい。待っててね。手洗いとうがいするのよ」

「ばあちゃんにも言われたよ。うん、じゃあね」

受話器を戻し洗面台に向かう。手洗いを済まし居間に戻るとテーブルの上にジュースと団子が出ていた。思わず口が綻ぶ。ちよこんと正座をし手を合わせる。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

そう言うつと祖母は座椅子に座りなおしテレビに目を向けた。ニュースでは何やら大きな事件を伝えているようだったが祐樹には何のことだかさっぱり分からなかった。もう少ししたら大相撲が始まる時間だ。あつという間に団子を食べ終え、ちびちびとジュースを飲んでいると、家の外から車が庭に入ってくる音が聞こえた。母が来たのだ。エンジンの音が消え、ちよつと間が空いて玄関が開く。

「お帰り」

母が居間に入ってきた。

「ただいま」

母はまっすぐ祐樹の方には行かず、居間の端にある仏壇に向かっ

た。りんを一つ鳴らし手を合わせ、聞き取れないくらいの声で何かを呟く。いつものことだった。一度聞いたことがある。祐樹の知らないお爺さんやお婆さん、いくつか飾ってある遺影を指差しこの人たちに挨拶をしているのだとは母は答えた。そのときの祐樹にはその意味が分からなかった。写真に挨拶をしている、それくらいにしか理解できなかった。今もそれは大して変わらない。ただ毎日のことで見慣れてしまったただけだ。

「今日も楽しく遊んだ？」

いつもの“儀式”を終え母が祐樹の隣に座る。

「うん。ねえお母さん」

「何？」

「さんかいきつて知ってる？」

「知ってるわよ。法事でしょ。どうしたの急に？」

新たな単語に祐樹は一瞬止まってしまった。ほうじ？

「優衣ちゃん、明日さんかいきなんだって。だから遊べないんだって」

「そう。お祖父さんかお祖母さんかしら？」

「うちもいつかさんかいきするの？」

母は目を瞬かせた。そしてふっと笑みを零す。

「そうね、あまりしたくはないけど、いつかはね。でも三回忌だけじゃなくて毎年法事はするのよ。ああ母さん、来月叔父さんの法事ね。7回忌だっけ？」

祖母は視線をテレビから外し仏壇の上の一つの遺影を見た。

「あらもうそんななるかしら？年取るわけね」

祐樹には二人の会話の意味が分からなかった。ジュースを飲み干して隣の和室に向かった。そこでは祖父の昭雄が布団に横になっていた。祐樹が物心着く前から祖父は寝たきりの状態だ。祖父が歩く姿どころか上体を起こしている姿すら見たことがない。目は閉じたままだ。寝ているのだろうか。確認してみようと近づいたとき、不意にそのまぶたが開いた。



「ん？おお祐樹か。どうした？」

「な、なんでもない。おやすみ」

慌てて部屋を出た。心臓がドキドキしている。祐樹は祖父がどうも苦手だった。祖母と違っていつでも笑顔で迎え、話を聞いてくれたりお菓子をくれたりしない、いつも同じところで同じように寝ているヒト。寝ていることが多いのであまり会話もしない。どちらかというととまるで他人のような感覚があったのかもしれない。

「じいちゃんに挨拶してきた？」

母の言葉に曖昧に返事をした。そして二、三母と祖母が何やら会話をしして腰を上げた。

「さ、帰ろうか」

車に乗り込み窓を開ける。

「またおいでね」

「うん、ばいばい」

車が発進すると同時に大きく手を振った。

祐樹の父は仕事から帰ってくるのがいつも遅かった。だからたまに早く帰ってくる日があるとしても嬉しかった。早く帰ったからといって特別することなどない。だがなぜだか早く帰ってきてくれると嬉しいものだった。祐樹がいつものようにテレビの教育番組を見ていると、父の車が帰ってくるのが窓から見えた。

「お父さん帰ってきたよ」

台所で夕飯の支度をしている母に伝える。自然に着いた習慣だった。嬉しくてつい口に出してしまうのだろうか。

「あら今日は早いわね」

母の声もやはり少し嬉しそうだ。車を止め、玄関を開ける音が響く。

「お帰り」

「ただいま」

父はソファの横に無造作に鞆を置きネクタイを緩めながら洗面所

に向かった。母が鞆から弁当箱を取り出す。

「ご飯にする？お風呂先がいい？」

「ん」。祐樹、久しぶりに一緒に風呂に入ろうか？

「うん！」

父と一緒に風呂に入るなど何ヶ月ぶりだろう。父は土日さえ度々出勤し、残業で遅くなるため祐樹はいつも一人で入っていた。

「じゃあお湯を入れるからもうちょっと待っててね」

母がお湯を張っている間に父と二人で服を脱いだ。

「まだ溜まってないわよ」

「体洗ってるうちに溜まるよ。なっ、祐樹」

「ねーっ」

ぱっぱと服を脱ぎ二人で浴室に入る。

「祐樹も大きくなったなあ。うちの風呂こんな狭かったっけ？」

父が祐樹の背中を流してくれた。これも久しぶりだ。

「はい、次はシャンプーな。あれ、これ使わないのか？」

父がシャンプーハットを差し出す。祐樹は首を横に振ってしゃしゃかと頭を泡で包み込む。

「もう使わなくなったの」

「そうか、早いなあ。父さん感心したぞ」

そう言って祐樹の頭を洗い出した。祐樹は嬉しくなった。本当はシャンプーハットを使わずに頭を洗ったことなど1、2度しかなかった。父に褒めてもらおうと強がったのだ。

「流すぞ」

祐樹はきゅっときつく目を閉じ、少しだけ下を向く。ザバァー、と大きな音と軽く下に押し付けられるような水圧。2回ほどそれを繰り返して祐樹はようやく半分ほどに溜まった浴槽に浸かった。

「どんどん大きくなるな」

父は自分の体を洗いながら呟くように言った。

「じきに俺よりでかくなるんだろうなあ、俺もあっという間に爺さんになっちゃうな」

そういう父の顔は少しだけ嬉しそうだった。

「お爺さんになるのが嬉しいの？」

「え？違うよ、お前の成長が嬉しいんだろ」

「そっか。ふふふ」

よく分からなかったが、父が喜んでくれるなら自分の嬉しかった。

二人ではと笑った。

「もうお湯止めていいぞ」

「まだ少ないよ」

父は蛇口をひねってお湯を止めた。立ち上がって浴槽に浸かる。

「これくらいでちょうどいいんだよ、ほうらな」

「おお」

父が浴槽に入ると水位が一気に上がり縁ぎりぎりのところまで上がってきた。

「ふう、気持ちいいな」

「ねっ」

父が胡坐をかき、その足の上にちょこんと座った。祐樹にとってはちょうどいい椅子代わりだ。

「いつまでこうして入れるかな？」

「いつまでって？」

「祐樹が大きくなったら一緒に入れないだろ、そこまで広い風呂場じゃないからな」

「ふうん」

祐樹にはいまちぴんとこなかった。自分にはいつまでたってもこの風呂場は大きく広く感じる。自分が父ほど大きく成長するなど想像すら出来なかった。

「僕大きくななくていいよ」

「なんで？」

「だって、お父さんと一緒にお風呂入りたいもん」

そう言って父を振り返る。父は嬉しそうだ。その顔を見て祐樹も微笑む。二人でふふふと笑った。

「お父さん、ペット飼ったことある？」

「ん？どうしたんだ急に」

「さっきテレビで観たの。ペット飼うのって楽しい？」

父は少し考えてから口を開いた。

「父さんも昔犬を飼っていたよ。まあ確かに楽しいかな。でも」

「でも？」

「死んでしまったときの事を考えるとやっぱり寂しいなあ」

父は少し悲しそうな顔をした。何か思い出したのだろうか。祐樹には分からなかった。

「死んじやったら悲しい？」

「もう会えなくなっちゃうからね。祐樹も父さんや母さんに会えなくなったら寂しいし悲しいだろ」

「うん」と頷く祐樹の頭を、父はやさしく撫でた。

「経験としてはいいんだろ。まだ祐樹には分かんないだろ。さ、そろそろ上がろうか」

父は祐樹を抱き上げ脱衣所で体を拭いてくれた。パジャマを着て居間に戻ると、カレーのいい匂いが部屋中に広がっていた。

祐樹はいつも走って幼稚園へ向かう。それには理由があった。一人で走っているときは色々なことを考えた。父や母と話したこと、昨晚の夕飯の美味しかったこと。一通り思い出した後は自分の世界に入っていく。この時間が優衣と遊んでいるときの次に好きな時間だ。その中では祐樹は仮面ライダーだったり戦隊ヒーローのリーダーだったりした。いつもの内気な自分とは似ても似つかないくらい強くて、格好良くて、皆の人気者だった。そんなことを考えているとあっという間に時間が経ってしまう。

「祐君おはよ！」

はっとして声のする方に顔を向けた。もうこんなところまで来たのかと自分で驚いてしまう。

「優衣ちゃん。おはよう」

優衣はいつもどおりの笑顔で祐樹に微笑んでいた。優衣はいつも家の前で祐樹が来るのを待っていた。ほんの300mほどの通学路を祐樹と一緒に通うために。だから、早く優衣に会いたいと、祐樹はいつも走るのだ。

「行こ！」

優衣が祐樹の手を取り二人で並んで歩き出す。これもいつもと同じだ。

「先生おはようございます！」

「おはようございます」

優衣の元気な声とそれより幾分ちいさな祐樹の声が聞こえた。中庭を掃き掃除をしていた直子先生が振り向いて笑顔で迎えてくれた。  
「優衣ちゃんに祐樹君、おはよう」

二人は教室に入っていた。すでに何人かの園児がお絵かきや積み木など、思い思いに遊んでいた。

「おはようー！」

優衣は大きな声で叫んだ。皆が一斉にこちらを見る。

「優衣ちゃんおはよう。祐樹君もおはよう」

「おはよう」

西幼稚園には祐樹と優衣のいるバラ組とすみれ組があるが、優衣はそのどちらの園児にも人気者だった。明るく活発で面倒見のいい優衣。人気者になって当然だ。祐樹はそんな優衣を見ると自分のことのように嬉しかった。でもその一方で少し嫉妬もある。皆の輪の中にいる優衣はとても輝いていた。それは二人でいるときも同じだが、皆といるときはそれが自分にあまり向けられていない、つまり、まるで優衣を取られたような思いに苛まれるのだ。祐樹は皆と少しだけ距離をとって優衣が楽しく皆と話している姿を見ていた。

祐樹が幼稚園で過ごす時間で好きな時間の一つに給食の時間が挙げられる。と言っても祐樹が食いしん坊というわけではなく、弁当食である西幼稚園では給食の時間は各自好きなところで食べていいということになっているからだ。教室の前でも後ろでも、中庭でピ

クニツク気分でも食べてもいい。祐樹はもちろん優衣と一緒に食べる。この時間はいつも二人だけでいられる。祐樹はそれだけで嬉しかった。二人はいつも決まって教室から直接中庭に出られるドアの段差に並んで腰掛けて弁当を食べる。室内でもあり、しかし景色は屋外というちよつと変わった空間が祐樹は好きだった。この場所はここしかない。外でも中でもなく、また外でも中でもあるこの空間にいるのは祐樹と優衣の二人だけだ。

「おいしいね」

「おいしいね」

いつも通りの会話。でも楽しかった。

「そういえば明後日遠足ね。どこ行くか聞いた？」

祐樹は首を横に振った。

「愛宕山だつて。ちようど見えるね」

優衣は正面を指差した。幼稚園の塀の上にちよこんと顔を覗かしている小さな山。それが愛宕山だった。ここからさして遠くはない。ちようど祐樹の家と同じ方向だ。

「僕んちから行った方が近いよ」

「登ったことあるの？」

再び顔を横に振る。

「うっん、でも家の窓からはもっと大きく見えるよ」

「楽しみね」

優衣は嬉しそうだ。体を動かすのが苦手な祐樹としては遠足なんて、しかも山登りなんて、という気持ちだったが、すぐに改めた。優衣ちゃんが楽しみなら僕も楽しみになってきた。

あつという間に遠足の日はやってきた。皆いつも以上にうきうきしていた。祐樹もいつもより口数が多かった。あまり話したことのない子達とも楽しく喋った。

「じゃあ行くよー、みんなちゃんと先生の後について来てね」

直子先生の声も皆と同じように少しだけうきうきしているように

感じた。きっと先生も昨夜は楽しみで寝られなかっただろうな、祐樹はそう思ってた嬉しくなった。そう、祐樹も実は昨晚はなかなか寝付けなかった。

「祐君、目赤いよ」

優衣が見透かしたように笑いながら言った。

「優衣ちゃんも赤いよ」

負けじと祐樹も言い返した。優衣はバレたか、とペロツと舌を出す素振りをした。そして二人してふふふと笑った。皆でまとまって幼稚園の門を出て行く。生まれて始めての遠足が始まった。太陽がまぶしい。楽しい一日になりそうだ。

2列に並び、前後に先生が1人ずつ付く形で歩いていく。愛宕山への道は祐樹にとっていつも通る見慣れた道だ。でも今日はなんだか違って見える。いつもならすぐに別れてしまわずの優衣がまだ隣で笑っている。

「祐君は毎日この道を通るんでしょう？」

「うん」

「一人だとちょっと怖いね」

「そうかな？」

「だってこの道のすぐ隣は山で木とか草とかがたくさんあるじゃない。お化けとか出てきそう」

眉をしかめる優衣。祐樹の手を握る優衣の手に若干力がこもった。「そんなことないよ」

祐樹は笑った。優衣もじきに眉を上げ、微笑んだ。

「祐君怖くないんだ。すごいね」

「すごいのか？」

すごいよ、そう言って微笑む優衣。祐樹はなんだかむずがゆい気持ちになった。

園児たちは各々思い思いのお喋りを楽しんでいる。その中に時々優衣も誘われるが、すぐに祐樹の方に向き直ってきてくれる。今日は優衣との時間がいつも以上に楽しく感じた。

「みんなー、そろそろ休憩しようか」

出発してから2時間ほど経ったころ、直子先生が皆の足を止めた。愛宕山の山道の手前、少しだけ開けた小さな公園のような広場があった。すぐ近くには小さな小川が流れている。

「川には気をつけてね」

はい、元気な声を響かせて、その場に座り込む者、日陰を探す者、早速小川に近づこうとして先生に怒られる者、皆わいわいと騒いでいた。

「行こ」

祐樹は優衣に手を引かれ、広場の端の木陰に腰を下ろした。

「疲れたね」

優衣は水筒を取り出した。蓋を開けそこに中身を注ぐ。

「祐君飲む？」

「僕もお茶持つてきてるよ」

リュックを下ろし中を漁ろうとする祐樹の手を押さえる優衣。

「まあまあ、飲みなさいな」

祐樹はありがとうと呟きそれを受け取った。一口含み、そして吹き出しそうになった。中身はお茶でなくオレンジジュースだった。

「お茶しか持つてきちゃだめだって・・・」

祐樹の口を押さえ、優衣は顔を近づけそつと囁いた。

「私たちだけの秘密ね」

そう言つてふふふと笑った。

「皆集まってー、出発するよー」

直子先生の声が聞こえた。優衣は残りを飲み干しさつさと蓋をしてリュックに戻した。

「ご飯食べたらまた飲もうね」

優衣はそう言つと立ち上がり、祐樹の手を引いて先生のもとへと駆け寄るのだった。

全員が集合し、一行は再び愛宕山へと登り始めた。優衣の手を握る祐樹の手は幾分力がこもっていた。足もなんだか軽やかだ。二人



だけの秘密、この響きは、祐樹を自分は特別なのだと思わせる不思議な力があつた。山登りは苦手だ、でも優衣と一緒に富士山だつて登れそうな気がしてきた。

ただ祐樹の体力がないせいか、それとも実際にそうなのか、愛宕山の山道は遠くから見ると随分と急な上り坂のように感じた。

「みんなついてきてるー？」

はいと返事する園児たちの声は朝よりも若干疲れたように小さくなっていた。

「結構きついね」

「そう？私はまだ平気」

運動が好きな優衣にとつてはこのくらいの坂はどうってことないようだ。にっと笑つて？サインをして見せた。

「僕もう汗だくだよ」

苦しそくに顔をしかめる祐樹。その顔をみて優衣はさらにふふふと笑つた。

太陽は昼前には祐樹たちの頭上にさんさんと輝いていた。頂上はまだ目の前だ。皆登り始めのような口数はなかった。優衣も口を開かなくなつて久しい。

「ゴールが見えてきたよ」

平気なのは先生2人のみのようだった。それから15分ほどでようやく山頂に着いた。そこは拓けた公園があり、決して多いとは言えないがいくつかのアスレチック用具もあつた。ベンチや木製の小さなテーブルが点々と設置してあり、皆思い思いの場所に腰掛けた。「お弁当食べましょう。皆ちゃんと手を洗つてねー」

「僕らも座ろうよ」

そう言つて見渡す祐樹の手をいつものように引く優衣。二人が向かつた先はベンチやテーブルではなく、皆から少し離れた木陰だつた。

「ここにしょ」

「ベンチかどこかにしないの？」

「だってここのが涼しいじゃない。それに皆がいたら飲めないですよ」

リュックから水筒を取り出したずらっぱく微笑む優衣。二人だけの秘密。その言葉が再び祐樹の頭に浮かび、また嬉しくなった。「手洗ってこよう」

リュックをその場に下ろし、二人は公園の真ん中に設置してある手洗い場に向かった。そこはすでに混雑が起こっていた。蛇口は二つ、それに対し園児と先生二人を合わせれば計26人。渋滞が起こるのも無理はない。祐樹たちは列の最後尾に並んだ。

「お腹空いたね、早く食べたいな」

「ジュー、じゃなくてお茶でも飲んで待ってればよかったね」

「そっか。優衣ちゃん頭いいね」

「もうちょつと早く気付いてれば、ね。それ皮肉に聞こえるわ」

「ヒニク？気の抜けた挽き肉？」

「どんな肉よ？まあ私もよく分からないから説明はなしね」

「あ、空いたよ。手洗おう」

手を洗い終わって木陰に戻るころ、他の園児たちは皆すでに弁当を食べ始めていた。中には早くも弁当を平らげ、お菓子に手をつけている男の子もいた。

「早いなあ、もうお菓子食べてる」

「男の子はもりもり食べるのがかっこいいのよ。ってママが言ってた」

「優衣ちゃんもそう思う？」

「そうねえ・・・」

祐樹は少しだけ不安に駆られた。祐樹はご飯を早く食べるのが苦手だった。その遅さといったら園児たちの中で1位、2位を争うのではないかというくらいだ。そして同様に沢山食べるもの苦手。優衣の言うもりもり食べる、という言葉からはまったく正反対の位置にいるような気がする。

「でも私より早く食べ終わられると負けたみたいで悔しいから遅い

方がいいかな」

そう言つてふふふと笑つた。祐樹の顔が綻ぶ。どうやら食事の遅さは優衣にとつてのダメな要素ではないようだ。

「ご飯食べるのに勝ち負けなんてあるの？」

「・・・おかしいかな？」

二人は顔を見合わせてふふふと笑つた。

食事を終え、二人で祐樹のお茶を分け合い、その後優衣のジュースを分け合つた。他の園児たちはアスレチックで遊んだり持つてきていたボールで遊んでいる。二人は木陰でその様子を眺めていた。

「優衣ちゃんたちも一緒にやらない？」

同じバラ組の響子がバレーボールより一回り小さなゴムボールを手に駆け寄つてきた。優衣は笑顔で首を横に振つた。

「もうちょつと休んどくよ。後で入れて」

響子はうんと頷き走り去つていった。

「やらないの？ 優衣ちゃんボールで遊ぶの好きなのに」

「いいのよ。これからまた歩かなきゃいけないじゃない、疲れちゃうよ。それにボール遊びは今じゃなくてもできるしね」

そう言つて優衣は微笑んだ。運動が苦手な自分に気を遣つてそんなことを言つのではないのだろうか、そんなことを思うほど、祐樹は深く考える子供ではなかった。優衣につられるようにふふふと笑うのであった。

「はい、みんな集まつてー。そろそろ帰りますよ」

一時間ほどの後、直子先生の声で皆一斉に遊ぶのをやめ、リュックを手に先生の元へと集まつた。先生の指示で公園内のゴミ拾いを行つた後、来た道とは別の山道を下り始めた。

「先生、こつちに行つたらどこに出るの？」

園児の一人が声を上げた。

「ここを下つたらねえ、ちょうど唐橋西小学校の裏に出るのよ」

「じゃあこの山を下りたら西幼稚園まですぐだね」

優衣が祐樹に話しかけた。

「下り坂だから楽だね」

登りのときとは打って変わって、祐樹は意気揚々と歩みを進めていた。

「休んだからかな？朝より元気ね」

「きつと優衣ちゃんのジューズが効いたんだね」

「しー！」

慌てて祐樹の口を塞ぐ優衣。どうやら周りには聞こえなかったらしい、ほっと息を吐いた。そして小声で祐樹を叱った。

「そんなこと言っちゃダメでしょ！」

「あ、ごめん。僕たちだけの秘密だったね」

皆の口数があまり減らないうちに坂は緩くなってきた。そしてふいに道が開ける。登りよりもたいぶ早い時間で下り終えたようだ。

「じゃあここで一旦休憩しようか」

山の登り口のすぐ近くには道に沿うように細く浅い川が流れている。そこには古びた小さな橋が架かっていた。先は草が生い茂っていて見えない。皆は川のほとりに並んで座った。

「せんせい、この先って何があるの？」

「えっと、確か古い祠があるとかきいたことあるなあ」

「ほこらって何？」

「神様を祀っている場所よ。神様が寝てるって言えばいいのかな？」

「神様がいるのにこんなほったらかしでいいのかな？」

少し離れた場所でそのやりとりを聞いていた祐樹はこっそりと優衣に言った。

「神様なんだからきつともう自分の好きなところに行っちゃってわよ」

「じゃあもうここにはいないのかな？」

「ちよつと寂しい気もするね」

「さあ、ゴールはもうちよつとだから、そろそろ出発するよー！」

直子先生の声で皆一斉に立ち上がる。幼稚園までもう何キロと離れていない。歩き出す一行の最後尾で、祐樹は生い茂る草むらで姿

の见えない祠に向かつてぺこりと頭を下げた。

「何してんの？早く行こうよ」

「神様がいなくても天使はいるかもしれないでしょ。あいさつとこうかなって」

「はいはい。相変わらず変なトコちゃんとしてるね。さ、行こ」

優衣はいつものように祐樹の手を握り、そして歩き出した。祐樹の頭の中では、優衣の描いた天使が二人に向かつて笑顔で手を振っているのだった。

## 宇宙人

「祐君は宇宙人って信じる？」

「宇宙人？」

コッペパンをほおばっていた祐樹はつい突飛な声を上げてしまった。

「いきなり何言いだすの？」

ぐつと気合を入れてから牛乳を口に含みコッペパンを流し込む。

祐樹は牛乳が苦手だった。飲めないというほど嫌いではないが好きでごくごく飲む子が信じられないくらいだった。言ってみれば優衣みたいな子だ。優衣は紙パックが凹んでしまうくらいに力いっぱいストローを吸ってからパックを平たく潰した。

「昨日テレビでやってたの。宇宙人の乗ってるUFOってのが最近よく見かけられるんだって。唐橋市もちらつと出てたよ」

小学校に上がって、祐樹は幼稚園の時のように自由に優衣と二人で昼食が食べられなくなってしまいがっかりしていた。クラスも別々で休み時間くらいしか会話することすら出来なくなってしまったほどだ。しかし2年生になった今年、優衣と同じクラスになれてその上席が隣同士になったときには飛び上がって喜びたくなるほどだった。再び給食の時間が好きになった。ずっと隣りあわせなのでついでに勉強の時間も好きになれた。考えてみればなんともゲンキな性格だ。

「僕そのテレビ観てないや。宿題やってた。面白かった？」

宿題のせいで観られなかったと言ったが半分は嘘だった。実際宿題はしていたのだが、番組の趣旨が宇宙人はとても恐ろしい存在かもしれないという作りだったので祐樹には怖くて観ることが出来なかったのだ。だがそれを観たという優衣の手前そんなことは恥ずかしくて言えなかった。

「面白かったよお、って言いたいところだけど正直怖かった」

優衣は恥ずかしそうにふふふと笑った。

「どんな感じなの？宇宙人って」

「えっとねえ・・・」

優衣は机の中から筆箱を取り出した。女の子に人気のアニメのキャラクターが描かれているカラフルな筆箱だ。そこから筆箱と同じキャラクターの描かれている鉛筆を一本取り出して、さらに机から適当にノートを取り出す。表紙をめくりその裏にせつせと鉛筆を滑らせていく。

「こんな感じ」

祐樹に向かって誇らしげにノートを掲げる。その顔はどうだと言わんばかりに自信に満ちている。

「・・・怖いキューピーちゃん？」

ノートに描かれていたものは、一見人間のような形だが頭でっかに大きなつり目、体は裸で手足は不自然に細い。

「どこがキューピーちゃんよ！怖いでしょ、色は銀色なの」

「へえ〜」

と言うしかなかった。

「それだけ？」

「すごいねえ」

と言うのが精一杯の感想だった。正直優衣のつたない絵ではさすがに恐怖までは伝わってこなかった。

「・・・まあいいけどさ」

優衣は不服そうに口を尖らせてノートを閉じ残っていたスープを飲み干した。

「ごちそうさま。あれ？祐君」

優衣の咎めるような声に祐樹は心持ち肩をすくめた。

「ニンジン残しちゃだめよ」

おかずの乗ったプレートの隅には小さく角切りにされた人参が小さな山を作っていた。

「だって」

「だってじゃないでしょ。ちゃんと食べなきゃ大きくなれないよ」

数人の男子生徒が楽しそうに談笑しながら教室を後にした。この学校では給食を食べ終えた者から昼休みに入っていていいので、早く遊びたい子供たちはさっさと食事を済ませて外へと繰り出すのだ。祐樹は食事の遅さと昔ながらの性格的な問題で相変わらずそんな活発なグループの輪に入ることができなかった。とは言えまったく変わっていないわけでもない。

「さ、早く食べて私たちも遊びに行こ」

優衣に催促されて、祐樹は嫌いな人参を、これまた嫌いな部類に入る牛乳で無理やり流し込んだ。

「よし食べた！えらいじゃん」

嫌いな食べ物が少なくない祐樹はほぼ毎日こうやって優衣に後押しされて給食を食べる。優衣に応援され、よく食べたと褒められるとまるで母親に褒められたように嬉しい。思わず笑みがこぼれるほどだ。

「食べてみるとおいしいでしょ」

「全然。不味いよ」

そう言いながらも優衣と一緒にふふふと笑う。

「ちゃっちゃんと片付けて行こうよ」

二人は空になった食器を乗せたトレイを持ち席を立つ。教卓には食器用のかごが置いてあり、スープ皿や小皿、種類別に重ねていく最後にトレイを重ねて終わりだ。教室にはまだ全体の3分の1の生徒が食事を続けている。ちよつと前までの祐樹は、これほど早く食べ終えられなかったはずだ。片付けるころには教室には2、3人しか残っていない、そんなことも少なくなかった。そのころに比べると随分と進歩した。通路の、教室に面した壁には出席番号順にネームプレートが張っており、小さなフックが備え付けられている。そこに帽子や縄跳びの縄を掛けるのだ。赤や青、黄色などカラフルなとび縄がずらりと並んでいるのはなかなか綺麗な光景と言えるかもしれない。でも悲しいかな幼い祐樹はそんな感受性は持ち合わせて



いなかった。自分の黄色いとび縄を手に持ち帽子を被る。優衣も準備を整え、

「行こ！」

と、祐樹の手を引いて靴箱へと向かった。

1年生も終わりに近づいた1月ころ、体育で初めて縄跳びの授業があった。基本的に運動全般は苦手な祐樹だったが、縄跳びは面白かった。こんなに連続でぴょんぴょんと飛び跳ねることなんて日常生活でそうはない。

二人は校舎と運動場の間にある中庭に出てきた。中庭にはうんていやジャングルジムがあり、1年生から6年生までが思い思いに遊んでいた。

「私後ろ跳びが出来るようになったよ」

優衣はさっそく跳び縄を両手で持ち、足で押さえピンと張った。

「よっ」

とび縄は赤く綺麗な弧を描き、優衣の体をくるりと包む。3、4回ほど回ったところで不意にその動きは止まった。

「あゝあ、引っ掛かっちゃった」

「すごいね、僕まだ一回も出来ないよ」

祐樹はまるで超常現象でも見るかのようなきらきらした眼で優衣を見ていた。

「もう一回やって！」

「ってか見てばっかないで祐君もやりなよ」

そっか、忘れてた、そう言ってふふふと笑った。優衣も釣られてふふふと笑った。

相変わらず他のスポーツは苦手な祐樹だったが、優衣が誘ってくれることによって徐々に体を動かすことが楽しくなっていたのは事実だった。運動に伴い、性格も優衣のお陰で少しずつ変わってきていた。1年生の3学期まで友達と呼べるのは優衣くらいなもので、気軽に話しかけられる友達はほとんど皆無だったのだが、2年生に上がり、慣れてきたこともあってか数人の同級生とは優衣ほどではな

いにしる話をするようになっていた。

「今日も縄跳びしてたの？」

教室に戻り席に着くと、安藤義信が振り返って尋ねてきた。

「うん。義信君もいつも通り？」

こくりと頷く。義信の昼休みの過ごし方といえば専らボール遊びだ。義信とは1年生の頃から同じクラスで、席も近かったお陰か何かと話しかけてくれていた。今回も祐樹のひとつ前の席に座っている。

「たまには優衣ちゃんたちも一緒にやろうよ」

「そだねえ。祐君はどう？」

「どうって・・僕はいいや。うまくないし」

「上手いとか下手とか関係ないよ」

義信が笑う。優衣も一緒に笑っていた。最近はこんな風に3人で話すことも少くない。こうやって優衣と義信の2人が笑っていることも多い。義信は、祐樹はもちろん、優衣よりもずっと身長が高く、運動も得意だった。見る限り食べ物好き嫌いもない。祐樹が考えている、格好いい男の子の代表のような存在だ。優衣と義信が2人で笑っていると言いつつ不安が頭をよぎる。そのうち、こんな頼りない自分に飽き飽きして、義信と遊ぶようになるのではないか、そんな考えが祐樹を陰鬱な気分にするのだ。午後の授業開始を知らせるチャイムが鳴った。まるで救いの音だ。義信が名残惜しそうに前に向き直った。

もちろん仲良くなったのは義信だけではない。島田隼人と高橋智弘の二人は、どちらかというと祐樹と似た性格の持ち主だった。智弘は幼稚園から一緒だったが、隼人は小学校に入ってから知り合った。聞くと、私立の保育園に通っていたらしい。どうやら二人とも近所とは行かないまでも祐樹と同じ方面に家があり、下校はしばしば一緒になることがあった。それで友達になったのだ。とは言えなにせ3人とも内気な性格なので打ち解けるのに時間がかかった。それを手助けしてくれたのが何を隠そう優衣だった。とある下校時、いつも通り優衣と祐樹の二人で帰ろうとしていたときだ。

「あ、高橋君も家こつちなのか？じゃあ一緒に帰ろうよ」

その一言のお陰で智弘と、そして同じような感じで隼人とも仲良くなれたというわけだ。

「祐君は私がいなきや友達も作れないんだから」

そんなことを言われたことがある。普通なら何だと、といきり立つところだが、事実であることに加え、祐樹の性格的なところから、「そうだよねえ」と、あっさり認めてしまった。

「ちよつと。怒るところでしょ、普通。」

「そうなの？」

「そうなの？って・・・」

そこで一拍置いて、右手の人差し指を立てて諭すように言った。

「男がそんなこと言われて黙ってちゃだめよ。男はイゲンが大事なのよ。ってママが言ってた」

「イゲンって何？」

「う・・それは聞かないで。まあどつしり構えなさいって事よ」

「優衣ちゃんもそう思う？」

「そうねえ・・でも今のほうが祐君らしくていいかもね」

そう言ってふふふと笑った。

「喜んでいいのかな？」

そう言いつつ、祐樹も釣られてふふふと笑った。

今日の祐樹と優衣、そして智弘と隼人の4人の下校時の話題は昨日のテレビの話で持ちきりだった。

「智弘君も観たんだ、昨日の宇宙人の」

「うん。面白かったな」

「でも怖かった」

残念ながらその番組を見ていない祐樹は話に参加できなかった。隼人はどうか。

「宇宙人なんていないよ」

隼人は顔の大きさに比べて若干大きく見える黒縁の眼鏡をくいと

押し上げた。

「あら、何で？分からないよそんなの、ねえ祐君」

「え？あ、僕観てないんで」

「僕も観てないよ」

その言葉を聞いて祐樹はほっとした。話題についていけないのは自分一人だけではないようだ。しかしその喜びは杞憂に終わった。

「前に本で読んだんだけど、UFOの写真と違って偽物が多いんだって。」

「そんなのもあったよ。でもはっきり偽物って分からないのもあって、それは本当のUFOじゃないかって」

「それは手口がこうみょうなんだよ」

祐樹はその時になってふと気付いた。隼人もしっかり話しに参加してるじゃないか。

「あ、家着いちゃった。じゃあまた明日ね、ばいばーい」

「ばいばーい」

3人で優衣に手を振り、そしてまた歩き出した。

「でさ、UFOてのはね・・・」

智弘と隼人は再びUFO談義に花を咲かせていた。祐樹は一人ぼんやり考えていた。今日はあんまり優衣ちゃんと喋れなかったな。こうやってちよつとずつ優衣は自分から離れていくんじゃないだろうか。ふとそんなことを考える。一度考え始めると自分の世界にめり込んでしまうのが祐樹だった。そして話しが合う智弘や隼人と遊ぶようになるんだ。いや、もっと楽しく喋る、例えば義信のような人間に取られてしまうんじゃないだろうか。

「祐樹君どうかした？」

「え？あ、いや何でもないよ」

「じゃあ僕らこつちだから、また明日ね」

「うん、ばいばい」

結局宇宙人の話しは何らかの決着を着けられたのか。なぜか今頃そんなことが気になってしまった。お父さんが帰ったら聞いてみよう。

う。

「宇宙人？」

数日振りに早く帰宅した父はタオルで頭をがしがしと拭きながら浴室から出てきた。

「うん、昨日テレビでやってたやつ」

「ちよっと、服着てから出てきなさいよ。せめてパンツだけでも履いて」

母が夕食を運びながら口を尖らせる。

「いいじゃんか、減るもんじゃなし。なあ」

「ねーっ」

「子供を味方につけるなつての」

「それで宇宙人はどうなの？」

父は寝巻きを纏い、冷蔵庫から缶ビールを1本取り出してごくりと飲み込む音が聞こえてくるくらい思い切り喉に流し込んだ。

「宇宙人ねえ・・・」

「ご飯時に何の話してるの？」

「昨日テレビでやってたろ、UFOの」

テーブルについて手を合わせる。食事の時はテレビを消すのが尾藤家のルールだったので、夕飯を食べながらもその話題は続いた。

「私は信じないけどね」

母はそっけなく答えた。

「あっさりとまあ、夢がないよ」

「お父さんは信じるの？」

父はうーんと唸り、ピーマンの肉詰めにかぶりついた。

「見たことないし断言はできんな。言ってみりゃ幽霊みたいなもんだ」

祐樹はお茶を吹きそうになった。「幽霊？」なんて怖い響き。

「そ、幽霊。祐樹は幽霊って見たことないだろ」

こくりとつなずく。

「父さんも見たことない」

「宇宙人の話しはどこいったの？」

母が口を挟む。

「ちゃちゃ入れるなつて。見たことないのに幽霊つて怖いと思うだろ。それは言ってみれば少しは信じてるつてことだ。見たことないつて点は宇宙人も同じ。じゃあ宇宙人を信じるのもありなんじゃないか？父さんはそう思う」

祐樹は首をかしげた。父の言う意味が難しくていまいち飲みこめない。

「えつと・・・宇宙人は幽霊なの？」

「いやそれは・・・うん、面白い考え方かもな。宇宙人は実は幽霊で、UFOはさしずめ空飛ぶ棺桶つてところか。新説として学会に発表してみるか」

父はあははと笑った。祐樹は父の笑顔をきょとんと眺めていたが、やがて一緒にあははと笑った。

翌日、いつも通り優衣の家の前で優衣と合流し一緒に登校した。

「祐君明日は何するの？」

明日は土曜日なので学校は休みだ。週末が近づく度聞かれる恒例の質問だった。答えはいつも決まっている。

「別にするこたないよ」

即答。幼稚園時代からまったく変わらないやりとりだった。

「もう聞かなくても分かるようになってきたよ」

教室に入ると、すでに数人のクラスメイトが登校しており、授業開始までの思い思いの時間を過ごしていた。その中に隼人もいる。隼人は席に着き文庫本を読んでいた。タイトルを見たが、祐樹には何の本なのかさっぱり分からなかった。

「隼人君おはよう」

「あ、おはよう」

「そつえば・・・」

祐樹はふと昨日の智弘と隼人の宇宙人口論の結末を聞きそびれてい

たことを思い出した。

「昨日の話はどうなったの？」

「昨日・・・ああ、宇宙人の？」

隼人は文庫本にしおりを挟み閉じ、傷つかぬようそつと机にしまった。

「結局、決着は着かなかったよ」

「あの後もまだその話してたの？飽きないねえ」

優衣が呆れた声を上げた。祐樹がそつと囁く。

「優衣ちゃんが言い出した話だよ」

「それは関係ないでしょ」

「あ、それで僕家に帰ってからお父さんに聞いてみたんだ」

「お父さんに聞いたって宇宙人がいるかどうかなんて分からないだろ」

今度は隼人が呆れ声で言った。

「えっと・・・宇宙人は幽霊がシンセツとかなんとか・・・」

「宇宙人と幽霊が親切？」

優衣が素っ頓狂な声を上げた。

「新説でしょ。つまり新しい考え。宇宙人は幽霊でしたって？」

「あ、そうそう。そんな感じ」

「じゃあ死んだ人は幽霊になって、宇宙人にもなるわけ？」

「馬鹿馬鹿しい。僕は幽霊だって信じてないよ」

「でもそうだったら嫌だなあ。私死んだ人はかわいい天使になるって聞いてたのに。あんなつるつるでかてかな宇宙人になりたくない」

「かわいい天使って、あのキューピーちゃん？」

「失礼な。今はもつと上手く描けるよ」

「祐樹お帰り」

その日の夕方。学校から祖母の家に帰ると、母や親戚らが慌ただしく走り回っていた。

「ただいま。どうしたの？」

「祐樹は居間に入ってなさい、おやつあるからね。あ、ちゃんと手洗いうがいするのよ」

そう言うなり母はまた親戚らとともにそそくさとどこかへ去っていった。何事だろう？祐樹は仕方なくいつものように居間でおやつを食べた。今日は祖母もいない。そろそろ大相撲が始まる時間だ。そう思っていると、祖母が台所から出てきた。

「あら祐ちゃん、お帰り」

「ただいま。ちゃんと手洗ったよ」

先に言っただとぞと自慢げに微笑む。祖母もふつと笑ってくれた。だが「おとなしく待っててね」と言っただけ、やはり周り同様に忙しそうに部屋を出て行った。大相撲が始まった。一人きりで見るのは初めてだ。何となく寂しくなると、祐樹はテレビのスイッチを切った。不意に静けさが部屋中に広がる。部屋の外や庭では親戚らの話し声が聞こえるのだが、自分がいる部屋だけは何の声もない。祐樹がクッキーをかじる音しか聞こえない。やがてその音も消えた。クッキーがなくなったのだ。話し声もお菓子を食べる音もない部屋に自分は一人か。ふと宇宙人の話を思い出した。優衣ちゃんが、人間を連れ去ってしまう怖い人たちなんだって言ってたっけ。背中に寒気を感じた。仏壇の上の遺影がやけに生々しく見えて怖かった。誰かいないかな？いないか・・・いや、そういえば隣の部屋には祖父がいるではないか。いつも一人で布団に寝ている祖父。あまり話したこともない近寄りがたい祖父。だが今はそんな人でも寂しさを紛らわしてくれる存在だ。祐樹は、祖父がいる和室へと続く襖をそつとを開けた。

「あれ、じいちゃん？」

掛け布団がめくれている。そこに祖父の体は見られなかった。祖父もいないのか。上体を起こしている姿すら見たことのない祖父さえもいない。いったいどこに行ったのだろう。急に悲しくなってきた。まるで自分ひとり取り残されているような気分だ。

「祐樹、どうした？祖父ちゃんの部屋なんか来て」



突然の声にびくつとして振り返った。

「お父さん」

つい飛びついた。よかった、自分は一人ではない。

「おいおい、どうしたんだよ。・・そっか、祐樹も祖父ちゃんがいなくなつて寂しいんだな。」

「え？」

いなくなつた？

「どこか行つたの？」

「え？あれ、聞いてなかったのか？じゃあなんで・・」

「なんで？」

「ここで悲しそうにしてたんだ？」

「みんな忙しそう」

「ああ、相手してもらえなくて寂しかったんだな」

二人は居間に戻った。父がそつと襖を閉める。テーブルではいつの間に入ってきたのか親戚らがお茶を飲んでいた。「祐樹おいで」母が手を招く。皆一様に疲れた表情をしている。

「終わったの？」

「今のところはね。今夜お通夜なのよ」

「お通夜？」

「そつ、お葬式の前の日にするの。お葬式は分かるでしょ？」

祐樹はこくりと頷いた。確か死んだ人を天国に送るのだと母が言っていた。

「祐樹のお祖父ちゃんが死んじゃつたのよ」

そうなの、とだけ呟いた。祐樹は死というものをちゃんと理解できていなかった。皆に会えなくなる、そう解釈していた。さっきの自分のように、一人ぼっちになつてしまふということか。

「祖父ちゃん、寂しいね」

「そうね」

「寂しいと可哀相だね」

さっきの自分のように。

「そうね」

母の声が震えた気がした。祖母が鼻を吸る。誰かがテレビを点けた。ちょうど大相撲が終わったところだった。

居間の、祖父が寝ていた部屋とは逆隣の部屋を覗く。そこには大きな台座が出来ていて、その先の部屋への通路を塞いでいた。台座の上には、お供え物やろうそくなど、他にも祐樹が初めて目にするものが所狭しと並べられている。真ん中には祖父の大きな写真が窮屈そうに据えていた。台座の前には大きな、人間が入れるくらいの、木の箱が申し訳なさにひっそりと横たわっている。

「祐樹、そろそろ着替えようか」

母が、真っ黒いスーツを持ってきた。礼服という言葉もそのとき初めて聞いた。

「首苦しくない？」

母がネクタイを締めながら尋ねる。「うん」とは言ったものの、やはり慣れないせいか窮屈に感じた。

通夜が始まった。お坊さんは何やら呪文めいた言葉を発し続けた。その後ろで祐樹たちは正座をしている。どれくらい経っただろう、祐樹の足の痺れは限界に達しそうだった。「足崩していいよ」父がそう言ってくれたが、祐樹は我慢した。えらいな、そう言われたがただの意地だったのかもしれない。不意にお坊さんの呪文が止み、「御焼香を」と呟くように言ってから、お坊さんは体一つ分横にずれた。祖母から始まり、母の姉、その子供たちと、交代で台座の前に座った。何かしているようだが後ろからでは何をしているのか見えなかった。自分もするのだろうか？でも何を？前に行つて何をすればいいの？祐樹は足の痺れと相まってそわそわしている。その間にも順番は回ってくる。母が腰を浮かせ、台座の前に進んだ。そして祖母たちと同様に何かをした後に、元の場所に戻った。

「一緒に行こう」

父に促され、足の痺れを堪えつつ二人で台座へと進む。その時、ようやく木の箱の中身が見えた。「じいちゃん」思わず口走った。

「そうだな。おじいちゃん眠ってるな」

目の前に小さな陶器のお椀のようなものが2種類置かれている。その一つからは、線香が作る細く白い、糸のような煙が緩やかな曲線を描きながら天井へ上っている。もう一つのお椀には、細かく砕いた木の皮のようなものが入っていた。父がそれをつまみ、ちよつとだけ頭に近づけた後、煙の立っている方のお椀に入れた。

「やってごらん」

何？それ。祐樹は何となく照れながら、父がやったとおりに真似た。それを2回繰り返し、「さ、行こう」と言う父の声に促されて元の位置に下がっていった。それから同じように何人も人が出ては下がり、下がっては出てと繰り返された。今日は、今まで見たことがないくらい、祖母の家に来客があった。どの顔も祐樹の記憶にはない人たちばかりだ。近所の人や祖父や祖母の知り合いだろう。お互いに頭を下げ、小さな声で一言二言話した後、台座の前に座る。

ある者は涙を拭いながら、ある者は落胆の色を隠しきれず、訪れる者皆が悲しい顔をしていた。祐樹はそんな光景をぼんやりと見ていた。そして、自分一人だけが悲しいと感じていないことに気付いた。「まだ祐樹には分からないか」いつか父がそう言っていた。自分もいずれは死んで行く者を悲しく想う時が来るのだろうか。祖父とはあまり、というか全く遊んだことがなかった。まるで他人のように感じていた。そのせいもあるのだろうか。では、もしも父や母が死んだら。自分は悲しむことが出来るだろうか。会えなくなるのはやはり寂しい。それは、死に逝く者への悲しみと言えるのだろうか。もしも優衣が死んだら・・どちらにせよ、やはり今は涙は出なかった。

翌日の葬儀も、昨晚の通夜と大した変わりはないように感じた。お坊さんがお経を読み、皆一様に沈んだ表情で佇んでいた。祖母が皆の前で祖父に話しかけていた。祖母の、泣き声交じりの声を聞くと、祐樹も何だか悲しい気持ちになった。葬儀が終わり、親戚一同が火葬場へ移動した。祐樹はその中へは入らず、父と共に火葬場の外か

ら煙突を見ていた。やがて、煙突は昨晚の線香のように細く白い糸を吐き出し始めた。それを見ながら、祐樹は優衣たちと話したことを思い出していた。

「天使になるのかな？それとも宇宙人かな？」

「ん？何か言ったか？」

祐樹は首を横に振り、祖父の顔を思い浮かべた。じいちゃんの顔は天使より宇宙人の方が似合ってるかもな。父に気付かれぬよう、そっと、ふふふと笑った。煙突から伸びる煙が、風のせいかな、ゆらりと揺れた。

## 綱ヶ背橋の約束

「祐君は綱ヶ背橋の伝説って信じる？」

「つながせばしの伝説？何それ？」

祐樹の返事に、優衣は信じられないといった表情を見せた。その驚愕振りに思わず圧倒されてしまう。

「知らないの？高田町に住んで何年になるのよ」

「今年で12歳だから、ちょうど12年になるね」

「何に対する“ちょうど”よ？てか何まじめに答えてんのよ。ホントに知らないんだ」

祐樹は周りを見渡した。気付けば教室内には祐樹と優衣の他に数人の女子生徒しか残っていない。あまり会話をしたことがなかったので、助け舟を求めるのは難しそうだ。外は夕焼けで赤く染まっていた。

「今何時？そろそろ帰ろうか」

二人は授業が終わってからずいぶんと話し込んでいたようだ。とは言えたいした話ではない。ほぼ優衣が一方的に喋って、祐樹が相槌を打つといった感じだった。

「祐君、話逸らすの下手ね」

優衣がにやりと笑う。そしてこほんと咳払いを一つして背筋を伸ばした。右手を顔の横に持ってきて人指差しを立てる。

「ここ高田町には奥名川って川が流れてるでしょ。それがどこから流れてるか知ってる？はい、尾藤君」

突如人差し指を向けられて祐樹はびっくりしてしまった。

「え、あぁっと、ワカリマセン」

ふうとため息をつく優衣。そしてまた始める。

「愛宕山よ。その愛宕山に小さな小川があるじゃない。覚えてる？幼稚園のとき遠足で登ったとき休憩したところ。」

祐樹は目をきよるきよると、記憶を手繰り寄せる。不意に、小川のほとりにずり並んで腰掛ける園児の姿が脳裏に浮かんできた。  
「ああ。あつたね、山下りて麓のトコに。へえ、あそこから流れてるんだ、知らなかった。でも道に沿って流れてたし、橋なんてあつたっけ？」

「あつたよお。古い小さなやつ。覚えてない？ほら、先生にあの奥って何があるんですかって誰か聞いてたじゃん」

頭の上で電球がパツと点灯するイメージが浮かび、ぼんと手を叩いた。

「ああ、あつたね。草ボーボーで先が見えなくてね」

「そうそう、奥に祠があるところ」

そっか、と呟いて、祐樹はその時を懐かしく思い出していた。直子先生は今も元気でやっているだろうか。

「あれから愛宕山登った？」

「え？ううん、登ってないよ。祐君は？」

「一回だけお父さんと初日の出を見に行ったよ」

「へえ。綺麗だった？」

「だね。でも寒いし眠いしって記憶の方が強いよ」

そう言っただけで笑った。優衣も呆れたように顔をほころばせた。

「それで、何の話し？」

祐樹の質問にはつとずる。

「忘れてた。その綱ヶ背橋にはある伝説があるんだって」

優衣の目がキラキラと輝き始めた。先ほどと同じようにこほんと咳払いをして背筋を伸ばす。

「むかし、お母さんたちが私たちくらいの頃に流行ったらしいんだけど」

「その時点で伝説じゃないんじゃない？」

「揚げ足を取らないの。ってかその頃に流行っただけで、その伝説自体は昔からあつただってば。それでその伝説ってのはね、

満月の夜に、手を取り合って綱ヶ背橋を渡った男女は永遠に結ばれる。っていうものなんだって。」

「・・・ふーん」

「予想通りのリアクションね。で、それだけ？」

「それだけって言われても。それが本当だったらすごい話しだね」  
「でしょ！すごいロマンチックよね」

優衣は両手を胸の前で組み、うつとりとした眼を窓の外へ向けた。夕焼けは先ほどより濃くなっている。薄暗くなってきた。いつの間にか教室には優衣と祐樹の二人だけになっていた。

「でも本当なのかな？」

つい呟いた。あ、今は言わない方がよかった？おずおずと優衣の顔を見上げる。

「分かってないなあ。たとえただの伝説でも、そんな伝説のあるところ二人で行く、ってのが大事なんじゃない」

怒った様子ではない。ほっと胸をなでおろす。

「そんなもんかな？・・・まあいいか、そろそろ出よう」

祐樹は席を立ち机の横のフックからランドセルを取り上げた。優衣も、小走りで自分の席からランドセルを持ってきた。

グラウンドでは、男子生徒数名が何か大声で叫びながらサッカーボールを追いかけている。

「優衣ちゃんも混ざってくれば？」

「あのね、低学年じゃないんだから、さすがにもう男の子に混じって遊ぶほどやんちゃじゃないよ。祐君こそやればいいじゃない」

「優衣ちゃんと違って、僕は今でも運動は苦手なの」

「相変わらず得意なのはこれだけ？」

優衣が腕を前後に振り、走るまねをした。マラソンのことである。  
「得意ってほどでもないけどね」

祐樹がはにかむ。だが確かに、運動の苦手な祐樹が唯一他人と競える競技が長距離走だった。その実力は同学年の中でも抜きん出ているほどだ。

「そろそろ持久走の季節だね」

その言葉に衝撃を受けたのは、一年生の冬だった。持久走って、あの持久走？

「何それ？」

手袋の上から両手を擦りながら白い息を見つめていた祐樹は、ピタとその動きを止めた。

「何それって、祐君知らないの？」

「聞いてないよ」

「聞かなくても分かるでしょ、普通。しょうがないなあ、教えてあげる。持久走っていうのはね、長い距離を速く走るっていうスポーツだね・・・」

「知ってるよ。僕が聞いているのはそこじゃなくて」

「え？ああ、持久走大会の話し？」

「大会なの？」

眼を見開く。

「って先生は言ってた。冬にやるんだって」

祐樹は一気に憂鬱な気分になった。優衣と二人での下校は楽しい時間以外の何物でもない。しかしそんな話をされるとちよっと切ない。

「でも祐君、毎日学校まで長い道通ってるじゃない。意外に持久走得意なんじゃない？」

「運動は苦手だよ」

優衣は不意に足を止めた。

「どうしたの？」

振り返る祐樹は、優衣の顔を見て驚いた。

「何か怒らせるようなこと言ってたっけ？」

「祐君はいつもそう」

「そうって、何が？」

「もっと自信持たなきゃ。やってみなきゃ分かんないじゃん」



優衣はまだ立ち止まったままだ。

「じゃあ、頑張るよ」

「約束よ」

ようやく一歩だけ進んで、小指を立てた右手を出した。

「何？」

「指きりげんまんって知らない？」

優衣は、横に首を振る祐樹の右手を取り、自分と同じように小指を立てた。

「こうやって指を繋いで、ゆーびきーりげーんまーんうーそつーいたーらはーりせーんぼーんのーます、指切った！」

勢いよく繋いだ指を振りほどく。初めて聞くリズムに呆然としている間に、何やら儀式は終わっただけらしい。

「それで、これ何？」

「約束のおまじない。じゃあ帰ろっか」

そう言って、優衣はようやく笑顔を見せてくれた。

優衣からその話を聞いた1週間後のホームルームの時間に、先生から持久走大会開催の話が出た。「持久走大会があります」その言葉に、男子生徒は驚きとやる気の声が上がり、女子生徒からはただただ非難の声があげられた。祐樹も、気持ちは女子生徒派だったが、さすがに声には出さなかった。前もって優衣から聞かされていたこともあり、「ああ本当だったんだな」と落胆するのみだった。それから約一ヶ月後に大会が開催された。大会とは言っても、一日で全学年の競技を行うわけではなく、週末を挟んで6日間に分けて行われる。1年生の部は金曜日に行われた。朝礼が終わると同時に体操服に着替える。それだけでは寒いので、上からジャージを着込んで教室を出た。

「寒いね」

優衣が話しかけてきた。いつも通りの笑顔だ。

「優衣ちゃんは運動得意でうらやましいよ」

優衣はきつと表情を硬くし、「約束覚えてるね」と祐樹に念を押

した。こくりとうなずくと、またにこりと笑顔を見せた。

グラウンドに出ると、寒さは一層祐樹の体を硬くした。先生の指示で皆ウォーミングアップを始める。ジョギングで走る程度で、息は相変わらず白いが、だんだんと体の冷えは薄らいでいった。10分ほど経って、ホイッスルの音がグラウンドに響いた。集合の合図だ。

「では持久走大会を始めます。まずは女子の部から」

女子の走るコースは、200mのグラウンドを4周、つまり800m。石灰で引かれた真っ白いスタートラインにずらりと並ぶ。「位置について、よいーい」パーンという乾いた音とともに一斉に駆け出した。

「頑張れー」「行け行けー！」

男子たちはグラウンドの内側で応援している。祐樹もそれに混ざって優衣に声援を送りたかった。だが、寒さと緊張と、そして何より内気な性格がそれを邪魔する。しかし、そんな必要もなかったかもしれない。あつという間に、脚の速い子と遅い子の差が、もうすぐで一周となるところだった。

「優衣ちゃん速い」

先生たちも思わずそう叫んでいた。優衣は、一人どころか、3、4人ほどに一周差をつけてゴールへと突き進んだ。その直前、グラツと体が傾いたかと思うと、体勢を立て直すことが出来ずそのまま前のめりに倒れてしまった。ああつと、一斉に声を上げる。祐樹もそう呟いた。その隙に数人の女子生徒が優衣を追い抜いてゴールしていった。優衣は顔を歪ませ、ゆっくり立ち上がった。「頑張れ」心の中で叫ぶ。右足の膝からは血が滲んでいる。見ている祐樹の方が痛くなった。だが優衣は、くつと唇を噛み締め、残り数十mを走りきった。にわかに拍手が起こった。発信源は、祐樹ではなかった。先にゴールした女子生徒の一人だった。それに感化され、更に数人が拍手を送った。優衣は照れくさそうに笑いながら、服に付いた砂を払った。祐樹も、誰も気付かないくらいこっそりと手を叩いた。

女子生徒全員が走り終わり、息つくまもなく次は男子の部。スタート地点へ向かう祐樹の腕が後ろからさっと掴まれた。振り返ると、うつすら涙目の優衣が立っていた。

「惜しかったね。膝大丈夫？」

「悔しい。セツジヨクを晴らして」

「・・・セツジヨクって何？」

「それは聞かないで」

それで何をどう晴らせと言っただろう。しかし、負けず嫌いの優衣の悔しさは分かるつもりだ。30人も人数が横一列に並ぶことは出来ない。スタートラインのすぐ後ろはすでに数人の男子に埋め尽くされている。仕方ないのでその後ろに入った。緊張のせいか、急に心臓が高鳴りだし、苦しくなった。「位置について、よい」先生の声が遠くに聞こえる。パーンと、音が祐樹の脳に響く頃には他の皆は走り出していた。慌てて後を追う。祐樹は、普段学校に向かうのと同じくらいのスピードで走った。それが速いか遅いかと聞かれれば、中の上。大して早くもないスピードだ。祐樹は全体の中盤の位置で走り続けた。頭の中で必死に、優衣が待っている通学路を思い浮かべた。早く優衣に会いたい。その気持ちで、少しでも早く走れる気がしたからだ。しかし、順位は一向に上がる気配を見せなかった。現実はそのなにごくはないということか。ただ、奇跡でなければ、人があつと驚くことなど簡単に起こり得る。

「あと2周」

ストップウォッチを見ながら、祐樹のクラスの担任の小林先生が声を上げた。その時祐樹の脳裏に浮かんだのは、あと2周、もう？男子の走る距離は女子よりも1周多い5周。1kmということになる。祐樹の家から学校までの距離の、約半分。3周走った時点で、祐樹が毎朝走っている距離の3分の1にも満たない。困惑しながらも、祐樹は徐々にスピードを上げることにした。一人、また一人。あつという間に追い抜いていく。普段の登校時よりもかなりのハイペースだ。でも全然疲れない。それどころか気持ちが良いくらいだ

った。

「ラスト1周！」

この時点で祐樹は驚異的な追い上げを見せていた。たったの1週で10人以上ごぼう抜きしていた。このまま行けば一位も夢じゃないかもしれない、そう思った瞬間、祐樹は突然の腹痛に顔を歪めた。走る速度もがくと落ちる。やはり速すぎたか。長距離走自体は慣れたものだったが、それほどまでに早く走ることはやっていない。わき腹を押さえる。残りは半周。今にももうすぐまりそうだった。

「ゆうくーん！」

はっとした。優衣の声だ。瞬間的に、毎朝見るあの光景が蘇る。優衣が、両手を振って祐樹に微笑みかけている。大声で、祐樹にはようと叫んでいる。その姿が見えると、祐樹はダッシュで優衣の元へ駆け寄るのだ。そうだ、早く優衣ちゃんのとこに行かないと。祐樹はキツと、半周先のゴールを睨み付けた。そして、全力で走った。わき腹の痛みも忘れて。ぐんぐんと速度を増し、再び祐樹は気持ちよさを感じていた。目の前にはゴール、その手前に数人の男子生徒。

「ゴール！」

結局、祐樹は4位でゴールインした。疲れと、思い出したわき腹の痛みで、その場に座り込んだ。うつむいて、必死に息を整える。隣に誰かが座り込んだ気配を感じた。右膝に絆創膏が貼ってある。「速かったね。やればできるじゃん」

優衣はいつも通りの笑顔を見せた。何か言おうと口を動かすが、息が上がって上手く言葉が出ない。

「はあはあ言い過ぎ。何？」

優衣が笑う。祐樹は、やっとのことで一言だけ呟いた。

「やっぱり、運動は苦手だよ」

優衣は、何それ、と言ってふふふと笑った。

祐樹も、途切れ途切れの息で、優衣に合わせてふふふと笑った。

「ねえ、ヒトの話し聞いてるかい？」

優衣の言葉に、ふと我に返った。もう優衣の家の前だ。いつの間にか、二人は足を止めていた。祐樹はただ優衣に合わせただけだったが。

「あ、ごめん」

「また妄想に浸ってたな」

優衣がぷうつと頬を膨らませ、上目使いで祐樹を睨む。

「妄想ってか、思い出に浸ってた」

「つまり、聞いてなかったってことね」

「・・・ごめんなさい」

優衣はふうとため息をつき、祐樹に向かって人差し指を突き出した。

「次の満月はいつ？」

「知らないよ。優衣ちゃんは？」

「私も知らない。でも今日でないことは確実よ。昨日見たときは半月にもなってなかったし」

祐樹は、そう、とだけ言って考えをめぐらせた。何の話しだった？満月・・・

「綱ヶ背橋の話か」

思わず口にしてはつとした。しかし口から出た言葉は飲み込めない。

「・・・本っ当に聞いてなかったのね」

優衣の目つきが更に厳しくなった。

「ごめんなさい」

先ほどと同じように謝った。優衣も、先ほどと同じようにため息をついた。

「もういいよ。また明日ね」

優衣はふくれっ面のまま、玄関のドアを開けた。一度だけ振り返り、あかんべーをした後で、軽く手を振った。祐樹は、笑おうとして失敗した、引きつった笑顔でそれを見送った。

翌日の早朝、一時限目が始まる前にトイレに行こうと教室を出たときだった。

「祐樹」

背後から声を掛けられ、振り返る。そこには、心なし緊張した面持ちの義信が立っていた。相変わらず祐樹よりも背が高く、軽く見上げなければいけないほどだ。

「何？」

「ちよつといいか？」

トイレの入り口のすぐ横にある手洗い場に体を持たれかけ、うつむき加減に義信は一つため息をついた。

「先にトイレに行つていい？」

「すぐ終わるよ」

そうは言うものの、なかなか話し始めない義信に、祐樹は不信な気配を感じた。あの、勝ち気で明るくて、何にでも積極的な義信が何を言いよんどんでいるのか。

「あのさ、いきなりなんだけど」

ようやく、ぽつりと呟くように喋りだす義信。義信の緊張が伝わってか、祐樹も思わずごくりと生唾を飲み込んだ。

「祐樹って、優衣ちゃんのが好きなのか？」

「へ？」

声が裏返った。いきなりすぎる。

「な、何で？」

「だって、いつも一緒にいるだろ」

「まあ、ね。でもそれは昔からのことで」

「じゃあ、特に好きってわけでもない？」

それはない。心の中で否定する。僕は優衣ちゃんが好きだ。でも、いざ改まって誰かに聞かれると、やはり恥ずかしくて正直には言えない。

「どうかな？あんまりそういうの分かんない、かな」

義信の顔が少しだけ上がった。

「俺は、優衣ちゃんの事が好きだ」

どくん、祐樹の代わりにとでも言うように、心臓が大きく飛び跳ねた。手がじんわりと汗ばむ。

「それって」

「友達としてってことじゃなくて」

口の中がからからだ。水が飲みたい。でもそんな、動揺している姿を見せ付けるわけにはいかない、そう思った。負ける気がしたからだ。何にかは分らないが。

「告白するとか、まだ考えてないけど。まだ小学生だしな。付き合う付き合わないってのはちょっと早い気もするし。」

年齢など関係あるのか？祐樹には、そんな判断すら出来なかった。「まあ、一応祐樹の気持ちを聞いと思うてさ。ありがとな」

義信は、一方的にまくし立てた後、さっさとその場を後にした。

祐樹の答えをどう捉えたのか分からない。しかし、去り際の義信から悲観的な印象を受けなかったということは、自分にとって良いように解釈したのかもしれない。それは同時に、祐樹にとっては悪い解釈ということか。祐樹は、結局トイレには行かず、そのまま教室に帰った。

「どうしたの？黙り込んで。昨日のことだったらもういいよ。元々怒ってないしね」

授業の合間に、祐樹の席まで遊びに来た優衣がそう笑った。祐樹は朝の、義信とのやり取りを考えていた。言った方がいいのかな？もちろん、義信にそんなことを頼まれたわけではないし、勝手にそんなことをしたら告げ口みたいで嫌だ。そして何より、それを聞いた優衣がどんな反応をするのか、考えたくなかった。内気で、背も小さくスポーツも苦手。まるで魅力ゼロの自分と、明るくて面白くて、スポーツも勉強も得意な義信。どちらも同じく自分を好いてくれているのなら、やはり魅力的な義信に惹かれるのは当然だ。いつからか漠然と考えていた不安が突然身近にやってきた。優衣が祐樹

に愛想を尽かし、かつこいい男の子と並んで笑い合っている映像が浮かんだ。とつさに首を振りそれを振り払う。

「何やってんだ？」

智弘と隼人がやってきた。

「さつきから黙ったまんま何か考えてんの」

「得意の妄想だね」

「優衣ちゃん」

川島響子が近づいてきた。

「あら皆お揃いなの？」

響子は、幅広い優衣の友人たちの中で最も仲の良い女の子だった。それゆえ、いつも優衣のそばにいる祐樹、そして智弘と隼人とも気軽に話せる仲になっていた。内気な祐樹ら3人にとって、異性の友人というのはなかなか希少だった。それもこれも優衣のお陰だ。その優衣が、いつか自分を捨てる日が来てしまうのだろうか。祐樹は今日何度目かのため息をついた。

「何かあったの？」

「分かんない。ずっとこうよ」

「学校来るときもこうだった？」

「あ、来るときは普通だったよ」

「じゃあ登校後に何かあったってことだね」

隼人は、まるで探偵にでもなったかのようにうーんと唸りながら眼をきよろきよろとさせた。

「ねえ」

ようやく口を開く祐樹。皆が一斉に注目した。

「そろそろ次の授業始まるよ」

一瞬の空白の後、優衣達は揃ってため息をつきつつ、祐樹の席から離れていった。

「うそ、安藤君が？」

智弘は目を丸くして驚いた。隼人も、態度には出さなかったもの



の、興味深そうに眼をパチパチさせ、眼鏡をくいと押し上げた。昼休み。3人は校庭のイチヨウの木の下に座り込んでいた。

「絶対誰にも言わないでよ」

「分かってるよ」

「つまり、祐樹君はそれを聞いて悩んでたわけだね」

智弘がきよんとする。

「安藤君が優衣ちゃんを好きで、何で祐樹が悩むのさ？」

「取られるかもしれないから」

祐樹が慌てる。

「取られるって、別にそんなつもりじゃ・」

「かつこよくて、運動も勉強も得意な安藤君と、特に魅力のない祐樹君」

「なるほど。そりゃあ安藤君を選ぶだろうなあ」

「君ら、友達を落ち込ませて楽しい？」

祐樹が恨めしそうに二人を睨んだ。

「まあまあ。でも本当のことだろう」

「僕にはそこまで悩む意味が分からないけどね」

隼人がまた、眼鏡をくいと上げた。

「それはいま隼人が言った通りだろ」

「優衣ちゃんは皆に人気があるからね。祐樹君を捨てて安藤君のところに行こうと思えばすぐにでも行けるはずでしょ」

「小学生のセリフかい？それ」

「僕は色んな本を読むからね。最近は純文学なんぞをちよつと」

「こういう子供を何て言うんだっけ？」

「もやしっ子でしょ。僕最近お父さんに聞いたよ。何してた時だっただっけなあ・・・」

「続けて良いかな？」

「あ、ごめんごめん」

「えっと、優衣ちゃんは今も変わらず祐樹君とよく遊んでくれてるでしょ。つまり、今のところは心配することはないってことじゃない

いかなと」

「今のところは？」

「恋愛対象かどうかは別問題」

「れ・・・」

レンアイタイショウ？もちろん、意味が分からないわけではないが、そんなことは祐樹だって考えたことがない。

「まあ、そんなの抜きで現状維持ってのも一つの手だと思うけどね」  
「現状維持って・・・」

「このまま友達として付き合ってくってことだな。俺たちと同じように」

それはそれで悪くない。と言うか、

「付き合いたいとか一言も言っていないんですが？」

智弘と隼人は、顔を見合わせて、同時にため息をついた。

「じゃあ、一生今みたいにお友達やってくってことか？」

「一生って・・・少なくとも今はそれでもいいかなって」

「人生色々。まあ別にいいんじゃない？祐樹君がそれでよければ」

「うう、何か遠まわしに責められてる感じがする。っていうか、僕が優衣ちゃんを好きって決めて話してるけど、それも言っていないよね？」

驚愕の表情を見せる智弘と隼人。

「まさか、祐樹・・・」

「気付いてないと思うってたみたいだね。ただの友達ってレベルの好意じゃないことは誰が見ても分かるよ。・・・安藤君もそれを分かかって、敢えてそんな話をしたんじゃないかな」

隼人が、顎を引き、思案するように眼をきよろりと動かす。

得意の探偵顔だ。

「どういうことだ？」

「宣戦布告。いや、けん制？つまり、「お前と俺、どちらが優衣ちゃんに似合う男か、分かるよな？」って言いたかったんじゃないかな」

「まさかあ」

「自信家の安藤君が、直接告白しないのは言ってみれば不思議なことだと思ったよ。予め、邪魔者を排除して、地盤を固めてから、って考えだったわけだ」

「邪魔者って・・・」

「なんか俺、ついていけなくなってきた」

その言葉を聞いて、今まで真面目な顔をしていた隼人が不意に顔をほころばせた。

「面白かったでしょ？」

「へ？」

「いやあ、今ハマってる小説と状況が似てたからさ、ストーリーになぞって話してみたんだよ」

そう言つて、足元に置いていた手提げバッグから一冊の文庫本を取り出した。

「海野香織っていう、デビューしたての作家さん。どう？　こうやって、自分と照らし合わせてみると小説つても面白いもんでしょ」

隼人は、自分の興味のある話をするとき以外はあまり笑顔らしい笑顔を見せない。今は、もちろん満面の笑みだ。

「なんだよ。変だと思った。小説かあ」

智弘が、大袈裟にのけ反る。しかし、その声からはほっとしたような印象を受けた。作り話か、祐樹も同様にほっとため息をついた。しかしやはり、優衣には義信のことは黙っておこう、そう思う祐樹だった。

決意というほど厳格ではなく、意志というほど明確ではない。そんなものは、ちょっとしたきっかけであっという間に流れてしまうものだ。誰の格言だったか。隼人ならばと答えてくれるかな？　祐樹はそんなことを考えていた。その日の放課後のこと。教室を出ようとした祐樹の目の前には、優衣が仁王立ちしている。

「・・・さ、帰ろっか」

「あれからどうも気になっちゃってね。是非聞かせてもらえないか

しら？」

「何をでしょうか？」

「分かりきったことを」

祐樹は、優衣の脇をすり抜けようとしたが、ことごとく立ち塞がれた。

「帰ろうよう」

「じゃあ、帰りながら話してよ」

「・・・分かったよ」

黙っておこう、そう思った5時間後には、一番聞かせたくなかった人物の耳に入っていようと。優衣は、驚いた表情をしていたものの、そこまで嬉しいという顔ではないように見えた。

「嬉しくないの？」

「え、そりゃまあ、嬉しいよ。でも弱ったなあ」

「何が？」

「だって、今度の満月の夜、祐君と綱ヶ背橋に行こうって約束したじゃない」

昨日の話か。祐樹が思い出に浸っていて聞き逃した話だ。

「2人同時には付き合えないなあ、ね」

と言いながら、優衣はにやりとした。祐樹は、その笑みの意味は分からなかった。

「2人って、まだ誰がいるの？優衣ちゃんを好きな人が？」

優衣が怪訝な顔を見せた。

「・・・祐君は、私と綱ヶ背橋に行く約束をしたんだよね？」

「うん」

「もちろん、OKなんですよ？」

「うん」

「綱ヶ背橋の伝説、覚えてるよね？」

「うん」

「・・・はあ、まあいいよ。でも、忘れないでよ。次の満月の夜に、二人で綱ヶ背橋に行くこと」

祐樹は、理解できないうちにこくりとうなずいた。それを見て満足そうに笑う優衣。「じゃあまた明日ね」そう言つて、優衣は玄関を開けた。振り返つて手を振る。祐樹も、それに倣つて手を振つた。一人の帰り道。祐樹は、ようやく気付いた一つのことで頭がいっぱいだった。綱が背橋の伝説。そして優衣の「一緒に綱ヶ背橋を渡ろう」発言。それはつまり、事実上の告白ではないか。何を普通に受け答えしてるんだ、僕は。急に顔が熱くなつた。きっと真つ赤になつてゐるに違いない。祐樹は、恥ずかしさを堪えつつ優衣の顔を思い浮かべた。優衣とは6年以上の付き合いだ。もちろん、男女の付き合いという意味ではなく。しかしいつもそばにいた。それこそ恋人同士と考へても差し支えないくらい。祐樹は優衣のことが好きだった。今もそれは変わらない。でもこれは、異性としての好意なのか、友人としての好意なのか。考へたところで分かるはずもない。祐樹はただ、純粹に優衣が好きだった。昔からずっと、ただ好きだった。優衣だつて、祐樹を好いてくれるであろうことは、いつもそばにいてくれることで明らかだ。でもそれも、異性としての好意か、友人としてのそれか、祐樹に判断することは出来ない。恋人になる、それはつまりどうということだろう？人前で、堂々と手を繋げる？そんなの、今でこそ恥ずかしくてやらなくなつたが。幼稚園時代には当たり前に行つていたことだ。デートをするとか？休日に一緒に遊ぶことも少なくない。今更何が変わるといつのか。それも、考へたところで答えは出ない。ただ、これからずっと一緒にいたいと思ふ気持ちははっきりしている。僕は優衣ちゃんのが好きだ。それだけで十分じゃないか。いつの間にか、顔の熱は治まりつつあつた。

## 天使（２）

「祐君は天使って信じる？」

「天使？何？急に」

突然のことに戸惑う祐樹に、優衣はふくれっ面を見せた。

「忘れた？幼稚園くらいのとき教えてあげたじゃない」

「そうだったけ？」

祐樹は、天井に目をやり思い出そうとする仕草を見せた。

「ぱっと思いつけないなんて、なんてヒドイ人間だあ」

優衣は手を伸ばし、机に伏した。

「静かにしないと追い出されるよ」

祐樹は手元のノートに目を戻し、再びシャープペンを握った。> KRB<ここは唐橋市の市立図書館だ。> KRB<二人は高校受験のための勉強をするため、3週間ほど前からよくここを訪れるようになっていた。

「受験までまだ1年もあるよ。早過ぎない？」

そう祐樹が驚きの声を上げたのがちょうど一ヶ月前の今日だった。> 何言ってるのよ。昔から言うでしょ、夏を制するものは受験を制する」

優衣は胸の高さに上げた拳を力強く握り締めた。> KRB<目線はどこか空の向こうだ。> KRB<まるで選挙のポスターみたいだ、祐樹は笑いを堪えつつそう思った。

「でも、夏までだって3ヶ月くらいあるよ」

「夏から始めたって夏を制するなんて無理に決まってるでしょ」

「それはそうだろうけど」

そのやりとりの数日後から、二人は毎日のように図書館に通い受験勉強に勤しんでいる。

祐樹の成績は、学年で中の中。> KRB<いたって平均だ。しかしそれはあくまで学校内だけでの成績。> KRB<市内で、県内で、

と見るとその成績は随分と後ろへ後退してしまう。>KRB<二人が目指す桂北高校は、進学校とまではいかないまでも、県内で見ればそこそこ無名ではないレベルではある。>KRB<簡単に言えば、祐樹の学力では早め早めの勉強が必要なわけだ。>KRB<それに対し、祐樹よりも若干成績の良い優衣には多少なりとも余裕がある。>KRB<その余裕が今の態度に表れているわけだ。

優衣はそのそと上体を起こし、ふと呟いた。

「そろそろ満月だね」

「そう。よく知ってるね」

「そっけないなあ。橋のこと忘れちゃったの？」

祐樹はシャープペンをそっとノートの上に置いた。体ごと優衣の方を向く。

「何？」

優衣が首を傾げる。眉の辺りで綺麗に切りそろえられた前髪が少し揺れた。>KRB<祐樹がゆつくりと口を開く。

「そろそろ閉館だよ。帰ろうか」

夕暮れの道を、二人は歩いて帰った。>KRB<二人が通う中学校は、家から学校までの距離が長い生徒のみ自転車通学を許可されている。>KRB<祐樹は自転車を押して、優衣の隣を歩いている。>KRB<突然、祐樹の目の前に優衣の顔が迫ってきた。>KRB<シャンプーだろうか、いい香りがした。

「たまには二人乗りして帰ってみる？」

「学校の先生にでも見つかったら怒られちゃうよ」

優衣が悪戯っぽく微笑んで前へ向き直る。

「祐君はホント小心者だなあ。そんなんじややっていけないよ、キミ」

「何をだよ？っていうか、小心者じゃなく慎重派って言ってほしいな」

「一緒でしょ。ところでさっきの話、ホントに覚えてないの？」

「さっきの話？」

優衣がふくれっ面を見せた。>KRB<そういえば、昔からこの顔が好きだった。>KRB<祐樹はふとそんなことを考えた。

「私って結構モテるのよ」

「だと思っ。いいことだ」

横から、ふつとため息が聞こえた。

「そうよくもないけど・・・とにかく、しっかり捕まえてないといけないのよ」

「分かつてるつもりだよ」

「・・・綱ヶ背橋の話」

不機嫌そうな声。>KRB<もちろん、本気で怒っているわけではない。>KRB<祐樹は照れながら答えた。

「わざわざ言わなくなたって分かつてるでしょ。忘れるわけないよ。ちゃんと覚えてる」

確かあれは6月の事だった。>KRB<つまり、3年前のちょうど今頃だ。>KRB<祐樹と優衣は、満月の夜に手を繋いで渡った二人は永遠に結ばれるという伝説がある綱ヶ背橋と一緒に渡る約束をした。>KRB<それから約一週間後、その日は来た。次の授業の準備をしているときだった。

「祐君、今日満月だよ」

優衣が嬉しそうに駆け寄ってきた。>KRB<机をはさみ祐樹の正面に立つ。

「ほんと。どうりで最近夜明るいと思った」

優衣は、少しだけむっとした顔を見せた。

「そうじゃないでしょ」

綱ヶ背橋のことを言っているのは分かっていた。>KRB<だが、恥ずかしくてわざと気付かない振りをしたのだ。

「何時に待ち合わせしようか？」

祐樹は後ろを振り返って、壁に掛かった時計に目をやった。そして優衣に視線を戻す。



「おじさんたちは大丈夫なの？日が落ちてから出かけて」

「明日は休みでしょ。だから、お父さんたちには響子ちゃんの家泊まるって言うてある。」>KRB< 響子ちゃん家にはそれから行くって言うてる」

それはつまり、響子は二人が今夜綱ヶ背橋を渡ることを知っているとということか。>KRB< 私たちは付き合います、と宣言しているようなものだ。>KRB< 恥ずかしくなって俯いてしまった。

「それで、どうしようか？」

「とりあえず、日が落ちる前のほうがいいよね」

「じゃあ、6時前くらい？満月がはつきり見えるようになるのは7時くらいだと思うけど」

優衣が時計を見ながら言った。>KRB< 優衣は立っているので、席に着いている祐樹からは見上げるような視点になる。>KRB< 祐樹はじつと優衣の顔を見上げていた。

「何？」

目線に気付き少しだけ戸惑う優衣。>KRB< 顔がちよつとだけ赤らんだ。

「いや、なかなかこの位置から優衣ちゃんの顔見たことないし」

小学校3年生の秋、祐樹はついに優衣の身長を抜いた。>KRB< それ以来、このような場面でしか優衣を下から見上げることはなくなつた。

「止めてよ、下から見られるのってなんか嫌だ」

優衣はその場にしゃがみ、顔だけ机の上に出した。>KRB< 祐樹は、巣穴から顔だけ覗かせている小動物を連想した。

「分かった。じゃあ6時前だね。迎えに行くよ」

「というか通り道なんだけどね」

「何の話？」

突然背後から声を掛けられてびっくりした。>KRB< 振り返ると、祐樹のすぐ後ろに義信が立っていた。

「あ、義信君。珍しいね、うちの教室に入ってくるなんて」

「いや、なんとなくね。教室の前を通りかかったとき楽しそうに喋ってるのが見えたから何話してるのかと思って」

一瞬言葉に詰まった。>KRB<一週間前、義信は祐樹に、自分は優衣のことが好きだと話した。>KRB<その人間に「僕たちは今日綱ヶ背橋を渡るんだよ」などとは言えるはずがない。

「実は今日満月なのよ」

優衣が嬉しそうな声を上げる。>KRB<思わずぎょとした。

>KRB<まさか話すのだろうか、祐樹はとまどった。

「満月？」

「そう。満月って私好きなよね。まん丸で、夜なのにとっても明るいでしょ。」

「迎えに行くとか何とか言ってたなかった？」

義信は綱ヶ背橋の伝説を知っているのだろうか？>KRB<だとしたら、今祐樹たちが話していたことはある程度予想がつくだろう。>KRB<だから、不安になって話しかけてきたのではないだろうか。

「祐君のお父さん、今夜出張から帰ってくるんだって。それで駅まで迎えに行くって話してたのよ。だから私が、夜に外出るんだったら満月を楽しむといいよって教えてあげてたわけ」

「そうなんだ・・・」

義信は、腑に落ちない表情をしていたもののそれ以上は何も言わず、授業開始のチャイムを機に教室を出て行った。

「また飛んでるでしょ」

優衣の一言でふと我に返った。>KRB<二人は赤信号で止まっていた。>KRB<そのことすら今になって気付いた。>KRB<祐樹一人だったら信号無視をしていたところだ。

「いや、まあちよつと」

祐樹はばつ悪そうに愛想笑いを浮かべた。

「まったく。高校行ったらそんなにばーっと出来なくなるよ。桂北

高は授業の進みが早いんだって」

「らしいね。一昨日の三者面談の時言われたよ」

「そっか、祐君のクラスはもう終わったんだよね。どうだった？」

「緊張したよ。何でだろうね？先生と話しても親と話しても緊張しないのに、先生と親と一緒に話すと何か緊張しちゃう」

「うちのクラス明日なんだよね。嫌だなあ」

あまりに辛そうな表情をするので、祐樹は思わず吹き出してしまった。> KRB< 信号が青に変わり、二人は再び歩き出す。

「優衣ちゃんは別に問題ないでしょ」

「そんなことないよ。今年は倍率高いつて聞くし」

「だったら僕は今以上に勉強しなきゃいけないってわけ？」

今度は祐樹が辛そうな表情をする番だった。

「祐君」

優衣が、笑顔で祐樹の顔を覗き込む。

「何？」

「面白い顔するね」

「優衣ちゃんの真似だよ」

「そこまで面白い顔しないよ」

「えゝ、するでしょ」

「しないよお。ふぐみたいじゃん」

智弘、隼人、そして響子の3人がお腹を抱えて笑っている。> KRB< 義信が去ってから45分が経った。> KRB< 次の授業までのしばしの休み時間。> KRB< どんな経緯だったか、祐樹は優衣の顔真似をしていた。

「本当に、優衣ちゃん是不機嫌になったときこんな顔するんだよ」

「でも私は一回も見たことないよ」

響子の言葉に智弘も隼人も頷いた。

「でしょ。4対1でそんな顔はしないって事に決定。祐君は大袈裟なのよ」

「本当にするのになあ」

他愛もないお喋り。>KRB<いつもと変わらないはずなのに、祐樹にとって今日はいつも以上に楽しく感じた。>KRB<恐らく、今日の約束を意識しているせいだろう。>KRB<今夜、優衣と二人で綱ヶ背橋を渡る。>KRB<永遠に結ばれる、その言葉の意味も重さも、祐樹には実感はない。>KRB<でも素敵な事なのだろうという程度には分かっているつもりだ。>KRB<では、優衣はどれくらいに考えているのだろうか？好きな人とロマンチックな伝説がある橋を渡ってみたい、きっとその程度の軽い考えではないと思う。>KRB<自分以上に理解力があり、感情が豊かだ。>KRB<伝説の意味も重みも、祐樹よりも遥かに理解しているはずだ。>KRB<そこまで考えて、また自分一人の世界に入ってしまったていることに気付いた。

「あ、ごめん」

祐樹の突然の謝罪の言葉に4人はきょとんとした。

「え、いきなり何？」

「あ、また妄想の世界に入ってたんでしょ」

「ああ、俺気付かなかった」

「僕も。というか皆でしょ」

チャイムが鳴り響く。授業開始だ。>KRB<優衣たちはそれぞれ自分の教室や席に戻っていった。>KRB<授業中、祐樹は先生の間を見て何度も後ろを振り返り時計を見た。>KRB<確実に、刻一刻と時間は過ぎていく。>KRB<でももどかしかった。>KRB<もしここにタイムマシンがあれば、すぐさま飛び乗って夕方の6時前にタイムスリップするのに。>KRB<祐樹はノートの端に、ドラえもんが登場するタイムマシンを描いた。>KRB<祐樹は絵を描くのが得意だった。>KRB<唯一優衣よりも出来ると自負できるものだ。>KRB<タイムマシンを描きながら、綱ヶ背橋を渡る二人を想像した。>KRB<すつと、いつもより控えめに優衣が手を出す。>KRB<そっか、手を繋ぐんだっけ。>KRB<

何年ぶりかの優衣の右手の感触。＞KRB＜それは、昔となんら変わらず柔らかく、暖かい。＞KRB＜目が合い、はにかむ二人。＞KRB＜ゆつくりと一步踏み出した。＞KRB＜祐樹の右足と優衣の左足が同時に地に着き、こつと音を立てる。＞KRB＜そして世界は劇的な変化を見せるのだ。＞KRB＜奥の祠から暖かく眩い光が射し、二人の全身を包む。＞KRB＜もう一度目を合わせ、二人は進みだした。

一步、また一步。

進むにつれ、二人の手はよりしつかりと繋がれていく。＞KRB＜優衣が何か言葉を発した。＞KRB＜よく聞こえなかったが何故だか嬉しかった。＞KRB＜そして、橋を渡りきるころ、チャイムが鳴った。

「明日でちょうど3年だね」

祐樹は横目で優衣の顔を見た。悪くない反応だ。

「どうせそのうち数えなくなるでしょ」

悪戯っぽく笑う優衣。＞KRB＜祐樹も、わざとらしい微笑みを見せた。＞KRB＜そして、前へ向き直る。

「永遠って僕の記憶より長いのかな？」

一瞬の間。優衣がくすつと笑うのが聞こえた。

「永遠なんだから、ずっと長いに決まってるでしょ」

「でも、」

「でも、何？」

「でも・・・あ、もうすぐ優衣ちゃんの家に着いちゃうよ」

優衣がコントのようにずっこける真似をした。

「フツー、自分から話ふつといて途中で止める？」

「でも僕らしい、でしょ」

「まあ・・・うん、祐君らしい」

優衣の笑顔からそつと目を逸らした。＞KRB＜これから先どのくらいこの笑顔を見ることが出来るだろう。永遠？だいいいな。一

生？うん、悪くない。

「小学校のとき、裁縫で縫いぐるみ作ったの覚えてる？」

そう言う優衣の声はどことなく楽しそうだ。>KRB<何かを隠しているが隠し切れない、そんな感じ。

「縫いぐるみ？ああ、あったね。男子はクッションだったっけ」

確か小学4年生のときだった。>KRB<そのとき祐樹が作ったクッションは、いまや祐樹の家にはない。>KRB<あつという間にどこもかしこもほつれ、ぼろぼろになってしまいすぐに捨ててしまったのだ。

「あれから結構ハマってね、時々作るの」

「縫いぐるみを？」

「そう、私そういうの得意なの。実は手先が器用なんだよね」

わざと何かを遠まわしにしているような・・・何が言いたいのだろう？

「何か隠してる？」

「別に」

そう言うてにやける優衣。>KRB<祐樹はちょっとだけ笑ってそれ以上は聞かないことにした。>KRB<優衣の家の前で立ち止まる。

「じゃあ、また明日・・・って何？その手は」

祐樹の言葉を遮るように優衣が片手を祐樹の顔の前に伸ばしている。

「ちょっと待ってて」

そう言うたとさつと玄関の向こうへと消えていく。

少しして出てきた優衣の手には20センチ足らずの、初めて見る、しかし見覚えのある縫いぐるみが抱えられていた。

「じゃーん！」

効果音と共にそれを両手で差し出す優衣。

「これって・・・」

「覚えてる？」

言葉もなく頷いた。＞KRB＜それはまさしく祐樹が初めて見た天使、つまり、幼稚園の時に優衣が書いたあのつたない天使だった。『すごい、完全にあのまんまだよ』

『やっぱ覚えててくれたね。信じてたよあたしゃ』

おどけた調子で言う優衣。＞KRB＜その顔は満面の笑みだ。

『最近部屋の掃除をしてたら幼稚園時代のお絵かき帳が出てきてね。懐かしくて見てたの。そしたらこの天使があつて。明日で丸3年でしょ、その記念つてことで』

祐樹は優衣の手からその天使を受け取った。

『どう？なかなか器用でしょ』

『ほんとすごいよ、優衣ちゃんって絵を描くのはちよつとあれなのに』

『ちよつとあれつて何よ。私だつてやれば出来るの』

その言葉を聞いて祐樹がふふふと笑った。＞KRB＜ふくれっ面をしていた優衣もやがて、祐樹につられてふふふと笑った。

祐樹は、天使を小脇に抱えて一人家路に着いた。＞KRB＜途中何度も天使の顔を覗き込んだ。＞KRB＜全くあの時のままだ。＞KRB＜恥ずかしくて言えなかったが、祐樹は優衣の描いた天使を鮮明に覚えていた。＞KRB＜初めて見た感動だろうか、天使と聞いたらいつも優衣の天使が最初に頭に浮かぶほどだ。＞KRB＜それが今自分の手の中にある。＞KRB＜更にそれが優衣が作ってくれたものとなると特別も特別、そう考えるだけで笑みを抑えることができなかった。

家に着き、さっさと自分の部屋へと入る。＞KRB＜祐樹の机は本棚とスタンドライトを置くために一段高い棚が備え付けられているタイプだ。＞KRB＜そこにそつと天使を座らせた。＞KRB＜モデルがああ優衣の絵ということもあつてバランスが悪そうだったが、意外にもちゃんと座ってくれた。＞KRB＜天使は微笑みを絶やさぬ顔でこちらを見つめている。＞KRB＜祐樹も笑顔で見つめ返す。＞KRB＜まるで優衣と見つめ合っているような気恥ずかし

さを感じつつ、それでも本人とはこれほど長い間見つめあうなど恥ずかしくて到底出来ないだろうと少しだけ自分の意気地のなさを残念がりつつ、少しの間そうしていた。> K R B < 気付けば窓から射す光が、先ほどより若干赤く染まっていた。

祐樹の家は寢静まるのが比較的早い。> K R B < 10時過ぎには皆床に着く。> K R B < そのため、9時ごろから就寝の準備を始める。> K R B < そのとき祐樹はちょうど歯磨きを終えたところだった。> K R B < 電話が鳴る。> K R B < この時間帯に尾藤家に電話が掛かってくるのはちよつと珍しい。> K R B < 母親が受話器を取った。

「はい、尾藤ですが。あらこんばんは、ちよつと待ってね」

同級生の高橋君から、そう言つて受話器を祐樹に差し出した。> K R B < 智弘からだ。こんな時間に何の用だろうか。

「もしもし」

「祐樹、落ち着いて聞けよ」

智弘の、まるで芝居がかった台詞に少し吹き出した。

「何？もつたいぶつて」

「クラスの連絡網だ。これ聞いたら次の人に回してくれ」

夜の9時に回す連絡とはどのようなものだろう、祐樹は若干の緊張を感じた。> K R B < そして得体の知らぬ胸騒ぎも。

「優衣ちゃんが、事故に遭った」

ん？

智弘の言葉の意味が掴めなかった。

「ごめん、もう一回」

「何度も言わせるなよ、こんなこと」

さつきよりも短い間の後、智弘は若干大き目の声で言った。

「だから、優衣ちゃんが事故に遭ったんだ」

まるで夢の中にいるようだ。> K R B < 智弘の声も、見慣れたはずの自分の家の景色も何か曖昧に感じる。



「聞いてるか？」

返事をする事が出来なかった。「んん」と曇った唸り声のようなものが精一杯だった。

再び沈黙。祐樹は思った。>KRB<何か足りなくないか？

「そうだ、どこの病院？」

「え？」

「優衣ちゃんが運ばれた病院」

ごくりと生唾を飲む。

「こんな時間に連絡網使うつてことは、かすり傷だけでもう帰りましたってことはないんでしょ」

こんな時間に、連絡網を、まだ、足りない。

「あ、ごめん。それは聞いてない」

五感が悟る。智弘の様子のおかしさ、連絡の不自然さ、まだ、足りない。

「終わり？」

「次の人に連絡を・・・」

「本当にそれだけ？」

三度の沈黙。ほぼ確信。

「どうせ明日になれば先生が話してくれるさ。お前がわざわざ次の人間に言う必要はない」

「分かってる。前置きがあるってことはまだ何かあるんでしょ」

もう慣れた4度目の間。

「死んだって」

ポツリと呟いたその言葉は、全ての時間を止めるに足る力を持っていた。>KRB<遠くに聞こえていたテレビの音が完全に消えた。>KRB<自分の呼吸の音も聞こえない。>KRB<心臓が動いているのすら感じない。>KRB<蛍光灯の光が激しく瞬いている。>KRB<君は何を急ぎ立てているの？

眼がくらむ。立っていられない。宙に放り投げだされたみたいだ。優衣が微笑む。壁に手をついた。名前を呼ばれた。祐君。優衣ち

やん、そんな遠くから呼んだって聞こえないよ。吐き気を感じる。

「ありがとう、次に回すよ」

受話器を置き、倒れこむようにその場にしゃがみこんだ。

「どうしたの？祐樹、顔色が悪いわよ」

母の優しい声も、父の心配そうな顔も、夢の中のぼやけた幻のようだった。

葬儀は二日後に執り行われた。> K R B < 優衣の家ではなく学校から3キロほど離れた葬儀場だった。

「焼香はクラスから代表者一名ずつだ。仲良かった者、そうだな、川島やつてくれるか？」

昨日のホームルームで今日の葬儀の日程が知らされた。

「え？」

響子の気のない返事。> K R B < 無理もない、祐樹だって今声を掛けられたらそんな情けない声を出すはずだ。

「先生」

聞きなれた声。> K R B < もちろん同級生の声はみな聞きなれてはいるが、その中でも特に馴染みのある声。> K R B < うつむき、机を見つめてるままでも分かる。> K R B < 祐樹に優衣の死を知らせてくれた人間。

「どうした？高橋」

「祐樹、尾藤君にやらせてもらえませんか？」

「ああ、確かに仲良かったしな。尾藤、いいか？」

自分の名が呼ばれても、体はピクリとも反応しなかった。

「尾藤」

「え？」

ああ、やっぱり響子と同じような返事だ。> K R B < そんなことが、不思議と可笑しかった。

「明日の焼香、頼んでいいか？」

「・・・はい」

何とでもしてくれ、そんな自暴自棄にも似た気分だった。> K R B< 僕が焼香をしようが何しようがもう優衣ちゃんとは笑い合えないんだ。

その日は、学校には行かず朝から直接葬儀場で集合とのことだった。> K R B< 場所もはつきり分らないし歩いては遠いということとで母に車で送ってもらった。

「大丈夫？」

ミラー越しに、母と目が合った。

「何が？」

母はそれ以上何も言わなかった。> K R B< ありがたかった。> K R B< 知らせを受けてからの2日、まともに人と話していない。

葬儀は9時過ぎに始まった。> K R B< 広く無機質な大広間にひととき華やかに飾られている優衣の笑顔の写真、そしてその下の木造りの箱。> K R B< 祐樹の場所からは遠く、その中をうかがい知る事は出来ない。> K R B< そのままの方が良かったかもしれない。> K R B< あの箱には何が入っているのか分からない、そのまま終わった方が楽だったかもしれない。> K R B< それからずっと優衣の笑顔に見惚れていた。> K R B< 満面の笑み。> K R B< まるで天使のように可愛いな、この場合は優衣ちゃんが描いたのじゃない方ね、思つて、心の中でふふふと笑う。

そこではつと我に返った。> K R B< 祐樹の前の席に座っていた担任の先生が突然立ち上がったのだ。> K R B< 状況が読めなかった。> K R B< 先生はまっすぐ進んでいった。> K R B< そこでようやく理解した。焼香だ。> K R B< 昨日説明されたことを思い浮かべた。> K R B< 焼香は、担任教師、学年主任、その後各クラスの代表生徒の順のはずだ。> K R B< じきに祐樹の番が回ってきた。> K R B< 緊張した面持ちで優衣の前へと進む。> K R B< 近づくとつれ、お香の懐かしい匂いがした。> K R B< 約10年前に嗅いだ匂い。> K R B< 祖父の顔を思い出した。> K R B< そういえばその頃、死んだ人間は天使になるとか宇宙人になるとか話してたっ

け。

仏前に辿り着いた。祐樹はなるべく下を向いていた。>KRB< 余計なものは見るな。お香を一つまみ、眉間のあたりまで持つてくる。>KRB< きつとここで念を込めるんだ。>KRB< 何か、伝える言葉を。>KRB< しかし、気持ちが悪く落ちてないかい、伝えたいことが多すぎるのか、結局何も言葉が出てこなかった。

もう一度同じ動作を繰り返し、あとは振り返って自分の席まで戻るだけだ。>KRB< しかしそこで、自制が利かなかった。>KRB< 止める、理性が叫ぶのが分かる。>KRB< しかし視線はゆっくりと上がり、棺桶の中へ。軽いめまい。>KRB< 何て綺麗な顔をしてるんだ。>KRB< 寝てるだけじゃないのか？天使のような寝顔。もちろん優衣ちゃんが描いたのじゃ。って、もういいか。さあ、そろそろ眼を覚ます時間だよ、優衣ちゃん。皆が待つてるよ。

不意に背中に視線を感じた。>KRB< そうだ、今は葬儀の途中だった。>KRB< 優衣ちゃんの、葬儀の。一気に現実に叩き戻される。>KRB< 祐樹は、ややおぼつかない足取りで席に帰った。>KRB< やはり見るべきでなかった。>KRB< 受け入れがたい現実が、余計にまとわりつくような感覚がした。>KRB< 棺桶の中を見ず、ずっと曖昧なままでいればよかったものを。>KRB< いつの間にか、葬儀は終わりを迎えていた。

式場から棺が運ばれていく。>KRB< 霊柩車に乗り、遺族と共にその場を去っていった。>KRB< 周りで女子生徒たちがすすり泣いている。響子もその中に混ざっている。

「そつえば、安藤が来てないな」

智弘が近づいてきた。隼人も一緒だ。

「そつ、気付かなかったよ」

「何年か前、優衣ちゃんが好きだって言ってたろ。なのに、な」

どうでもいいことだ。誰が参列しようがしまいが、優衣ちゃんはもうここを離れた。

「やっぱ天使だよね」

「え？」

「覚えてない？昔、死んだら天使になるとか宇宙人になるとか言ってたでしょ」

「あつたっけ？」

「ああ、僕も何となくは覚えてる」

「やっぱ優衣ちゃんは天使になったと思うよ」

笑うつもりだった。>KRB<ちよつと微笑むだけでもいい、今の気持ちを少しでも変えたかった。>KRB<でも、優衣の口はちつとも笑う仕草をしてくれなかった。>KRB<すすり泣く声は依然続いていた。>KRB<そして気付く。>KRB<自分は優衣の死で一滴たりとも涙を流していない、と。>KRB<泣けないほど悲しいことがあるとは思わなかった。

## 運命

「祐君は運命って信じる？」

懐かしい言い回しに、思わず体がピクリと反応した。もちろん声はまったくの別物だ。机に無造作に置かれた教科書から眼を離し、机の向かいになつ人物を見上げる。

「響子ちゃん、どうしたの？急に」

「ちよつと思ひ出してね。よくこんな言い方してたでしょ、優衣ちゃん」

桂北高校に入学してもうすぐ3ヶ月が経つ。あれからもう1年が経ったのか、祐樹は遠くを見つめるように、窓の外へと目をやった。緑が生い茂る校庭の並木が眼に映る。

「運命っていわゆる、決まっている未来ってことでしょ」

響子は黙って祐樹を見つめている。

「あの木々は来年も葉を広げて、花を咲かせて、小さな実をつけるだろうね。それは、僕ですら分かつてても簡単に決まっている未来だ」

「つまり？」

校庭の木々から眼を離し、響子に向ける。

「人が言う未来なんて薄っぺらい。ひいては、人の言う運命も薄っぺらいってことさ」

「哲学的ね」

「天才も凡人も、結局は人だ。自力で空は飛べない」

「尾藤君もなかなか考えるヒトだったのね。ぼーっとするだけじゃなく」

響子の笑みに合わせて、祐樹も唇で薄く弧を描く。

「すぐ妄想の世界に浸るのは僕の専売特許だよ。で、どうして急にそんな話を？」

響子は少し目線を落とし、少し思案する素振りを見せた。芝居が

かった動きで、祐樹は少しだけ笑った。

「あの家に人が住むって」

ちよつと間を空けて、祐樹は「そう」とだけ答えた。

「来月頭からはその家の子もこの高校に来るらしいよ」

「運命的だね」

「そのセリフ言うのまだ早いよ」

それからまた少し間をおいて、響子は告げた。運命的な話の、真意を。

響子や隼人たちはもちろん、祐樹自身でも不思議なほど、優衣の死に対する動揺は短かったように思う。1ヶ月と経たないうち、周りは誰もこの話題を出さなくなった。人気も人望もあつた優衣を、唄ぶ声はあつても話題のネタとしてあげる人間はほとんど皆無だった。名前を聞かなければその事実を思い出すことも少ない。祐樹は極力誰とも話さなかった。そして得意の妄想の世界へと思いをはせる。そうすれば祐樹は優衣とまた会うことができる。夢に出てくれば触れることもできるしそのぬくもりも感じるができる。

しかし、それは真実への、後ろ向きな対処ではない。自らを制するためには有効だった。だが思い出の世界にどっぷり漬かっているだけでは先に進めるはずもない。

「教室に飾られる花って何かすごく綺麗ね」

これは響子の言葉だ。響子は、あるときから積極的に祐樹に優衣の話をするようになった。優衣の話題に触れられる度、祐樹の中の優衣はその姿をぶれさせた。

「何でそんなに優衣ちゃんの話をするんだ？」

ある日祐樹は、普段見せないような強い調子で響子に問うた。響子はいつもどおりの物静かな口調で答える。

「友達を腐らせたくはないのよ」

祐樹は憤慨した。亡き恋人を想うのが悪いことだというのか？響子の口調は変わらない。「もういない人間を、思い出すのと想い続

けるのは全くの別物よ」

「死んだんだからもう忘れろって？」

「言ってるでしょ。私だって故人を思い出すのは素敵なことだと思う。いなくなってもなおその人が私たちの中にはしっかり根付いてるってことだもの。でも、故人を想うのは意味がない」

自分の気持ち、意味のないものだ？

「忘れろっていつてるんじゃないよ。難しいかもしれないけど、想いを思い出に变えるべきよ」

認めきれない、でも響子がどれだけ自分のために考えてくれていたのかは伝わった。努力はするよ、祐樹はそれだけ言った。迷ったが、やはり礼は言わないでおくことにした。それから、一日中優衣の影を追うことだけはなくなった。

中学の頃から成績の良かった響子と隼人は、圭北高校の理数科に進んだ。あれから勉強どころではなくなった祐樹は、周囲に心配されながらも何とか普通科へと進学することが出来た。智弘は、近くの工業高校へ行き、皆が一斉に集まる機会はだいぶ減ってしまった。それでも、たまの休日にファミレスに集うことも少くない。

「ごめん、待たせた」

カラカラン、と小気味良い鈴の音が響き、智弘が小走りで祐樹たちの席に駆け寄ってきた。

「急に招集かけられてもそんなに早く来れねえよ。こちらら日々の生活で疲れてんだよ」

「あら、だったら断ってくれても良かったのよ。ねえ」

「まあ、無理に誘った覚えはないね」

「そんな冷たいこと言ふなよ」

響子の隣に腰を下ろす。

「で、今日の議題は？何か話すことがあるんだろ？」

祐樹は笑顔を作って答えた。

「いや、特に何も。最近トモに会ってないなと思って」



ふゝん、智弘は若干がっかりしたように、しかしそれ以上は何も言わずに納得してくれた。

「どう、高校生活は？」

響子が口を開く。

「俺に言ってんの？」

「君以外は皆同じ高校だよ、僕らに聞く必要はないだろう」  
いつも通りの隼人の鋭いツツコミ。

「可もなく不可もなく。バイトは結構疲れるけど楽しいよ」

智弘は高校生活1ヶ月過ぎから飲食店でアルバイトを始めた。圭北高校は原則的にアルバイトを認めていない。祐樹以下3人はやりたくても出来ないのだ。専ら、授業についていくだけで精一杯の祐樹にとっては、アルバイトなどする気も、する余裕もないのだが。

それぞれの前に料理が配され、彼らは世間話を交えつつそれを口に運んでいく。ある程度空腹が満たされ、皆の箸の動きが鈍くなった頃、響子が開口した。

「あの家に人が住むよ」

智弘の動きが完全に止まった。そして「そっか」とだけ言って、とんかつの最期の一切れを口に放り込んだ。十分に咀嚼し、水で流し込む。

「結構すんなり決まったな。もっと後になるかと思ってたけど」

優衣が亡くなって3ヶ月経つだろうかという頃、優衣の両親は家を離れた。仕事の都合で引越さざるを得なくなったというのが理由だったが、その真意は誰も知らなかった。いつまでも娘が亡くなった土地にいられないのだろうというのは、専らの噂でしかない。

元・小林家はそのままに残され、売りに出された。

「そうね。それでね、あの家の近くに私の親戚が住んでて色々聞いたんだけど」

そこで一旦、言葉を区切った。皆の視線は響子を取り巻いている。それを確認してから、再び続けた。

「苗字は大野。3人家族で、16歳の娘さんがいるって」

「俺らの1コ上？」

首を振る。

「今年で16。だから同級生ね」

「この辺りは僕も初めて聞くな」

隼人の口調はいつもどおり冷静だが、やはり興味はあるらしい。

「来月圭北高に編入。名前は、大野唯さん」

「え？」

予め聞いていた祐樹以外の二人は、絶句し、固まった。

「ユイ？」

響子の頭は、今度は縦に揺れた。

「字は違うけどね。優衣ちゃんと一緒のユイ」

「大野唯が、元小林優衣の家に、住む」

そして自分の同級生になる、祐樹は心の中で呟いた。

「運命的だな。ま、とはいえあの優衣ちゃんとは別人なわけだし、

こんな偶然もあるんだなってことだな」

智弘は明るく言い放った。あれから1年経つのだ、早いかもしれ

ないが、いつまでもそのことを引きずる必要はない。

「だろ？祐樹」

「もちろん」

当然だ。優衣が住んでいた家に住み、ユイという名を持っているからと言って、その娘が優衣と何かしらの関係があるわけではない。それから4人は、全く別の話で盛り上がり、大野唯という名の赤の他人の存在を忘れ去った。

8月に入り、夏らしさは勢いを増してきた。考えずとも、首筋を伝う汗が夏の到来を思い出させてくれる。

教室に入り自分の席へと進むにつれ、室内の様子がいつもと違うことにすぐに気付いた。祐樹の席は窓側から2列目の最後尾。クラスメイトの人数の関係で祐樹の左隣、つまり一番窓側の列は一人分席が少ない。しかし今日はそこに、一対の席が用意されていた。そう

か、大野唯が今日から登校してくるのだ。まさかこのクラスに入ってくるとは。

席に着く。自分の隣にユイが来るのだ。小学校の頃を思い出した。優衣と隣り合わせの席になったのは2年生の1回きりだった。本当なら今隣にいるのは優衣だったはずなのだ。優衣と肩を並べて授業を受け、終われば二人で一緒に帰り、土日にはどこかに遊びに行っていただろう。

朝のホームルームが始まった。祐樹はいつもどおり、左手の窓から外を眺める。そこには優衣が佇んでいた。満面の笑みで祐樹に微笑む。祐樹も、誰にも気付かれぬようこっそりと微笑み返す。その時だった。

「ユイです。よろしくお願いします」

稲妻が落ちた。その声を聞いた瞬間、全身に鳥肌が立った。まさか、思わず声が出た。

「優衣ちゃん」

そう、その声は一寸違わず優衣のそれだった。そしてその姿は、

「何だ尾藤、大野と知り合いか？」

担任の吉岡が驚いた表情を見せる。クラスメイトたちも祐樹に注目している。その面々が眼下に見える。気付くと自分はその場に立ち上がっていた。何かのいたずらか、とまで思った。眉で綺麗にそろえられた前髪までも同じだった。

「いえ、多分初対面だと思いますけど」

大野唯が少し困惑したように、しかしその口元には笑みが浮かんでいた。その笑みもまた、彼女の声と同じように、優衣のそれそのものだった。

「偶然と運命は共存しないわよ」

響子は笑みを浮かべ、諭すように言った。

「じゃあ川島さんはどっちだと思う？」

祐樹は背後の壁に背をもたれた。通路のそれは、教室内のものよ

り冷たく感じた。

「偶然に決まってるでしょ」

「でも運命を信じるかって聞いてきたのは川島さんだ」

響子は少し思案して、開口した。

「つまり私の場合、その答えはノーってことね」

「あの、」

すぐ隣から声がした。優衣の、いや、唯の声だ。唯は一人だった。ぎこちない笑い。確信の持てない相手に話しかけたせいだろう。

それでもきつと自分の方がうまく笑えていない、祐樹は思った。

「たしか同じクラスの、えっと」

「あ、お尾藤、祐樹」

ぱっと、唯の表情に自然な笑みが広がる。

「だよね。あ、初めまして。大野唯です」

響子に向き直り、ぺこりと頭を下げた。響子も慌ててそれに倣う。

「あ、私は川島響子、です」

一目で響子の心境は分かった。祐樹がどれだけ似ていると言っても真剣に聞く耳を持たなかった響子だが、その眼はその事実をようやく信じたと如実に物語っていた。瞳孔まで開かんばかりに眼を見開いている。百聞は一見に如かず、か。

「今大丈夫？」

「ああ、うん。何？」

「先生に後で職員室に来るようにつて言われてたんだけど、私方向オンチで」

唯は少し恥ずかしそうに言った。どきりとさせられる表情だった。

「ああ、職員室はその階段を下りて・・・」

「あの、できれば連れて行ってくれると助かるんだけど・・・」

「えっ？」

「あ、出来ればいいんだけど。いや、やっぱり自分で行ってみる。ごめんね」

「連れてってあげればいいじゃない。ね、その方が確実でしょ」

響子が唯に微笑みかける。そして祐樹に視線を移す。

「私は次の授業の準備しないとだから、もう行くね」

そう言うのとさつとその場を離れていった。通路に残される二人。祐樹には若干重い空気に感じられた。何といつても初対面の人間と二人にされたのだ。たとえ優衣に似ているとはいえ。

「ごめん、邪魔しちゃったかな？」

「え、いや邪魔なんて。い、行こうか」

祐樹は歩き出した。緊張のせいか足取りは速く、唯が慌てた様子で追いかけてくる足音が聞こえた。

階段を2階下りてすぐ左に折れる。それから3、40m直線が続く。祐樹は唯の2、3歩先を歩いた。何ひとつ会話がない。その状態が祐樹を更に緊張させた。歩く速度も更に加速していく。

「ちょ、もうちょつとゆつくり歩いてくれない？」

突然話しかけられ、思わず立ち止まり振り返ってしまった。唯が苦笑している。

「あ、ごめん」

「ううん、尾藤君て歩くの早いんだね。着いていけないよ」

「そうかな？僕は着いていけるから何とも」

唯は一瞬不思議そうに眉をひそめ、それから白い歯を見せた。ふふと笑う。

「意外に面白いこと言うのね」

祐樹自身は緊張で何が面白かったのか分からなかったが、とりあえずは結果オーライと思うことにした。再び歩き出す。今度はなるべくゆつくり歩くよう心がけた。それでもおそらくは早かっただろう。しかし今度は唯は何も言わなかった。徐々に近づき、祐樹と肩を並べた。

「ここだよ」

職員室の扉の前で立ち止まる。

「どうもありがとう。助かった。もう授業始まっちゃうのにごめんね」

「いいよ。あの、教室までの道が分からなかったらここで待つておくけど?」

唯は「今いま通ったんだしさすがにそれは覚えてるよ」と言つて、先ほどよりも若干大きな声で笑つた。祐樹も顔を綻ばせる。良かった、多分自然に笑えてる、祐樹は思った。

教室に戻るとすでに授業は始まつていた。扉を開けたとたん、皆の視線を全身に感じた。物理教師の岡崎がお得意の、顎を引き少しずらした眼鏡の上辺から睨むようにこちらを見る。祐樹は岡崎のこの目が嫌いだった。

「尾藤君、どうしたかね?もうとつくに始まつているよ」

「あ、大野さんを職員室に案内してきました」

「大野?ああ、今日転校してきた子か。よろしい、席に着きなさい」軽く頭を下げ、クラスメイトの視線を全身に浴びながらそそくさと自分の席に向かう。席に着き、教科書や筆記具を机上に出してようやくほつとした。

唯が教室に戻ってきたのはそれから20分ほどしてからだった。扉を開けるなり、

「すいません、担任の内田先生に呼ばれていて遅れました」

と、はきはきとした口調で告げた。岡崎は先ほど祐樹に向けたものと同じ目線を今度は唯に向けた。そして祐樹のときと同じように「よろしい、席に着きなさい」と促した。唯は一礼し、足早に祐樹の方へ近づいてきた。隣の席だからそれは当然なのだが、まるで自分に向かって来ているのではないかと錯覚してしまう。優衣が自分の元へ。

「さつきはありがとね」

小声で祐樹に告げ、唯は席に着いた。筆記具を出す。それを見て祐樹は思った。唯は転校してきたばかりだ。きっと教科書等揃っていないだろう。ということは自分のを二人で見なければならぬということか、机を寄せて。鼓動が早まる。ごくりとつばを飲み下し

た。

「あの、良かったら見る？」

「ん？何を？」

きよとんとした顔をしながら、唯は机の横に掛けた鞆の中から教科書を取り出した。

「あれ、それ」

「あ、教科書？こっち来るのが決まってからすぐ取り寄せてもらったの。善は急げってやつね。ちよつと違うか」

「ああ、なるほど・準備いいね」

「でしょ」

左手の、すらりとした綺麗な指でピースサインをつくり、祐樹にいつと笑って見せた。それから二人は、岡崎がこちらに視線を向けていることに気付き口を閉ざした。

祐樹が卒業した西唐橋中学校からここ桂北高校に進学したものは祐樹や響子たちを含めて15人といない。他の面々は、学力的に同レベルの、それでいて近場の豊島高校に行った。祐樹が桂北高校に決めた理由は、優衣がそこへの進学を望んでいたから、というのが一番大きかった。優衣が桂北高校に来たがった理由はあまりはつきりとは覚えていないが。だから、優衣がいなくなった今、桂北高校進学は祐樹にとってあまり意味のあるものではなかった。しかし、今思えばこの選択は正解だったかもしれないというのが正直な気持ちだった。その理由はもちろん、唯だ。この学校には優衣のことを知っている人間は少ない。よって、優衣にそっくりな唯という人物が現れたことは、あまり話題に上ることはないはずだ。

「安藤君」

昼休み、祐樹は隣のクラスの義信の元へ向かった。義信は一人ぼんやりと窓の外を見ていた。

「安藤君」

耳元で呼ぶと、ようやく目線をこちらに向けてくれた。

「ああ、祐樹か。どうした？めずらしいな」

安藤は高校進学して、ずいぶん様子が変わった。元々スポーツ好きで引き締まった体をしていたが、更に痩せたように見える。

「今日、大野唯って女子が転校してきたの知ってる？」

安藤の頬がぴくりと動いた。知ってはいるのだろう。しかしそれだけにしては変な反応だ。

「もしかして、もう見た？」

心なしか虚ろな眼をしているように見えた。祐樹は思い出ししていた。昔、義信が祐樹に言った言葉を。俺は、優衣ちゃんが好きだ。

「正直びっくりしたよ、まさかあんなに、似てるなんて」

「・・・ああ、そうだな」

義信は、今でも、

「他の皆も知ってるのかな？」

「さあ、どうだろうな」

今でも、優衣のことを・・・？

「あの、出来れば大野さんには優衣ちゃんの話は聞かせないほうがいいと思うんだ」

義信は何も言わない。

「ほら、やっぱり大野さんもいい気がしないだろうし。それに、えつと・・・」

「わざわざ口に出したりしない。他の奴もそうだろうよ」

ぶつきらばうに言い放ち、トイレ行ってくる、と言い残し義信は祐樹に背を向け、教室を後にした。

祐樹はしばらく義信の背中を見つめていたが、やがて視線を義信が見ていた窓の外へ向ける。いつものように上手く優衣の姿を紡ぐことが出来なかった。

自分の教室に帰ると、片隅に少なからぬ人ばかりが出来ていた。祐樹の隣、唯の席だ。

「大野さんて東京の方から来たんでしょ？」



「やっぱこつちとは違う?」

「転校つて親の仕事の都合?何してるの?」

しばらく待っていていようかとも思ったが、すぐに散らばる気配もない。祐樹は鞆の中から文庫本を一冊取り出し、校庭へと出た。校庭の二辺、L字で運動場の一部を囲うように木々植えられている。その中でひとときわたくし大きな一本に歩み寄る。幹を背もたれにその場に腰掛けた。文庫本を開く。しばらく文字を眺めたが頭にはちつとも入ってこない。元々今読む気などなかったのだ、集中して読めるはずもなかった。

ふと、視界の隅に学校規定の白いスニーカーを捉えた。男子用だ。顔を上げる。逆光のせいでよく見えない。しかし、見慣れたシルエツトであることはかるうじて分かった。

「やあ、こんなところで会うなんて珍しいね」

「僕はいつも来てるよ。この場所は僕の特等席だね」

「それは申し訳ない。空けようか?」

「いや、こう見えて僕は友達には優しいのさ」

そう言うとき隼人は、すぐ隣に祐樹と同じように幹を背もたれしてに腰掛けた。

「どうしてこんなところで本なんか読んでるんだい?」

隼人の芝居がかったセリフが祐樹は好きだった。

「お隣さんが人気者だね。落ち着けないから逃げてきた」

「例の子?僕もさつき見たよ」

「どうだった?」

「どうって、まあ確かに見た目は似ていたね」

少し気になる表現だった。

「見た目はって?」

「そのまんまの意味さ。内面的なものは一切分からない。挨拶すらしていないし」

祐樹は「ああ、そういうこと」と呟いて頭を背もたれに委ねるように空を仰ぎ見た。

「第一声で衝撃を覚えたよ。本人かと思った」

今でも優衣の声をはつきりと思い出すことが出来る。唯の声、話し方は優衣のそれと全く同じだった。

「そうだろ」

隼人の声は先ほどより若干冷めていた。

「何？」

「本人かと思ったって？彼女は太野唯本人だよ。そうだろ？」

「・・・ああ、そういうこと」

咎められたようで、バツの悪さを感じた。二人はそれきり黙りこくってしまった。もうすぐ午後の授業が始まる。もう自分の席へは戻れるだろうか、祐樹はぼんやり空を眺めた。

社会科の金田先生の声はやけに高い。50歳に手が届きそうな年齢に反して服装は派手目で、街で見かけたらとても教師をやっているとは思わないだろう。真っ赤な口紅が、肌の色を覆いつくしてしまっている白いファンデーションとのコントラストで激しく強調されている。ぼんやりと見ると、黒板の深緑の景色に口紅とクリーム色のスーツだけが際立っている。

「尾藤君」

囁くような心地良い声。祐樹は金田に指摘されない程度に小さく首を左に向けた。

「どうかしたの？太野さん」

なるべく平静を装う。やはり初対面な上に好きだった女の子に似ていると緊張してしまう。

「さっき聞きそびれてたこと。後でもいいけどまた他の子たちが集まってきたやうと聞けなくなっちゃうし」

「何？」

「朝私が自己紹介したとき、「ゆいちゃん！」って。私のこと知ってたの？」

「ああ、それは・・・」

優衣と勘違いしたのだなどとは言えるはずもなく。

「えと、いい名前だなと思って」

「本当に？」

大袈裟なくらいに大きく頷いた。唯の目は明らかにその言葉を信じていない様子だったが、ようやく納得したのか、それともこれ以上問い詰めても無駄だと思ったのか、祐樹と同じように大きく頷いて、「ありがと」と笑顔を見せてくれた。そこで会話は途切れた。唯が前に向き直り、金田の声に耳を傾け始めた。

「尾藤君がこの近くの中学校に通ってたの？」

授業が終わった途端唯が話しかけてきた。いきなりのことで少し戸惑った。

「え、まあ。ちょっと離れてるけど」

「じゃあここには中学校の同級生ってそんなに多くないとか？」

「うん、そうだね」

「でも全くないよりはいいよね」

唯はそう言つてにつこりと笑った。明るく振舞ってはいるが、やはり別れてきた友達を恋しく思っているのだろう。「じゃあ僕たちが友達になればいい」そんな軽口を叩けるほど祐樹は社交的な性格ではない。同意を示すように頷く程度しか出来なかった。

「もうじき次の授業？」

「だね。数学だ」

「ありがとね」

「・・・何が？」

優衣が腰を浮かせてぐつと祐樹に近づいた。心臓がどきりと跳ねた。突然何を？耳元で囁く。

「あんまり周りでわいわい騒がれるのって嫌いな。ほら、昼休みのときみたいな。誰かとお喋りしていればそう入ってはこれないでしょ」

顔を離し、目と目が合った。唯がふふふと笑う。そのあまりにも馴染みのある笑いに、祐樹は自然に合わせられた。二人して、ふふ

ふと笑った。

帰宅途中、祐樹はふと思い立っていつもとは違うルートで帰ることにした。あの家の前を通ってみよう。どちらにしろ距離はそれほど変わらない。門を出ていつもとは逆の左に折れる。馴染みのない路をしばらく行くと、じきに懐かしい道に出る。そこはすでに中学校の近くだった。正門に面する道路を通る。校庭ではクラブ活動の少女少女が走り回っている。

ふと思いつき立ち止まる。回れ右をして、来た道を引き返し始めた。左から丁字路を右へ折れる。愛宕山へ向かっているのだ。あの祠のある場所へ。

「お待たせ」

優衣は玄関口に腰を下ろして祐樹の到着を待っていた。辺りは薄暗くなり始めている。笑顔で首を振り、立ち上がる。尻を叩きスリートの砂を払う。

「さてさて、行きますか」

傍らのトートバッグを肩に掛ける。

「そっか。このあと川島さん家に行くんだっけ」

そう思い出し、そして改めて今から自分たちが綱ヶ背橋に行くことも知っているのだらうと恥ずかしくなる。

二人は歩き出した。気のせいか普段より会話が少ないように感じた。きつと優衣も緊張しているのだらう。

「結構暗いねえ」

おどけた調子で言う声も、若干硬い気がする。祐樹は何も言わず頷いた。優衣ですらこんな調子だ。きつと自分はもつと変な声になっていることだろう。だからなるべく喋らないことにした。

「晴れてよかったね。ほら、満月が綺麗に見えるよ」

優衣が指す方に顔を向ける。思わずおお、と声が漏れる。もちろん満月自体は珍しくはないが、優衣と一緒に見るのは初めてだし、

今日の満月は特別な意味があるのだ。普段より何倍も美しく感じた。  
「僕らが橋を渡ることにはもう少し高くなっているかな？」

言った後に後悔した。優衣がくすりと笑う。

「祐君、声が上擦ってるよ」

「優衣ちゃんだっていつもよりちよつと変だよ」

「ちよつとでしょ。祐君とは違うもん」

通学路から一本奥に入った細い道。この先を行けば愛宕山の麓にある綱ヶ背橋が見えてくる。先ほども口数は増えた。気持ちが落ち着いてきたのだ。でもじきにまた緊張してくるだろう。橋が見えれば嫌でも意識してしまう。

路の左手は住宅が並び、右手は舗装された愛宕山の裾。月明かりは差し込まず、しかし暗くはなかった。家々から零れる優しい光。点々と立ち並ぶ街灯が弱々しく、自分もいるぞと主張する。路が少しばかり広がり、右手の木々は深くなる。もう少し行けば橋が見える。

「あ、月が見えるよ」

優衣が住宅の奥を指差す。眩しいくらいに明々と輝くそれは、他のどの人工的な明かりより力強く神々しく感じられた。手を繋ぎたかった。そして優衣といつまでも満月を見ていたかった。

「行こ！」

わざとらしく大きな声で優衣が急ぎ立てる。再び歩き出し、そして数分としないうちに二人は辿り着いた。綱ヶ背橋は月明かりに照らされ、祐樹の記憶の中の子びて朽ちかけたイメージを払拭した。美しいとも思えた。祐樹の左手が、自然と優衣の右手へと伸びる。

「尾藤君？」

日は傾きかけ、辺りは薄暗くなり始めていた。振り返る。夕日を背にして人影が3つ。優衣ちゃん、と朝のように声は出なかった。

「桂北高の同級生。同じクラスなの」

唯が二人に紹介している。恐らく両親だろう。

「尾藤君、私のお父さんと、お母さん」

戸惑いつつ、祐樹は頭を下げた。二つの影がそれに倣う。

「えと、今から買物にでも？」

空気に耐えられず、珍しく自分から口を開いた。

「いえ、食事に。尾藤君はこんなところで何をしていたの？こつち帰り道？」

「・・・まあ、帰れなくはない、かな」

「何それ」

唯がふふと笑う。祐樹も釣られてふふと、笑えなかった。優衣とでも、第三者がいる前では恥ずかしくて笑えなかったことを思い出した。

二言三言話した後、大野一家は去っていった。祐樹も、傍の小さな橋にちらりと一瞥しただけで、その場を後にした。橋は、あの時のように綺麗ではなかった。思い出はいつも綺麗だ、という誰かの言葉を思い出した。

家路を歩きながら思った。優衣との思い出の場所で唯と出逢った。これは偶然か、それとも運命か。川島さんなら「偶然以外の何物でもないでしょ」と笑い飛ばしているところだろうな。

## 正夢

「祐樹君は正夢って信じる？」

昔ならともかく今は即答できた。でもすぐには答えなかった。椅子に座ったまま、机の前に立つ人間の顔を見上げる。唯は微笑みを絶やさない。しばらくそうしていると微笑みはそのままで少しだけ小首をかしげた。

「正夢って分かる？」

その言葉に思わず吹き出す。

「まあ、一応はね。でもどうして急にそんな質問を？」

あの日から何度となく夢の中で見た光景。失ったはずの二人のやりとりが今正に行われている。これを正夢といわず何と言うのか。これも偶然かな？川島さん。

「ちよつとね、ふとそんな言葉を思い出して」

「ああ、あるよね。そういえばそんな言葉あったな、みたいな」  
窓から差し込む光は若干昼間の勢いを失っていた。赤みも差している。教室の窓からはテニスコートが見える。数十人の学生が練習に勤しんでいる。祐樹も唯もどの部活にも所属していない。唯はそのうち入るかもしれないが祐樹にはそんな考えは欠片もなかった。祐樹の机の前にしゃがみ、顔と両手の指だけ机の上に出している。小動物みたいだ、そう思った。

「で、どう？」

「どうって、そんな追及する話題かな？」

祐樹の顔が歪む。苦笑いだ。もしかして自分の気持ちが見透かされているのかという恥ずかしさもあった。取り戻したいと切に願った二人の関係。もちろん目の前の少女が優衣でないことは理解しているが、映像だけ見れば間違いなくあの日々の再現、夢にまで見た光景。正夢と言っている。

「信じる信じないってはっきりは言えないけど、そんなことも起こるかもね」

軽く濁した。あまりはつきり信じるとは言えない。「そんなことあったの？」などと問い質されれば、そのうち優衣に行き着いてしまいうさだ。唯に優衣の話は無用だ。

二人の距離が縮まるのにさほど時間はかからなかった。唯の性格はとても明るく、誰とでもすぐに友達になれるタイプ。もちろん、それだけでは祐樹とも友達で終わるだけだ。普段は人見知りする祐樹も自分自身驚くほど唯には積極的に話しかけた。席も隣同士だったので話す機会はたくさんある。

祐樹が唯に話しかけるのは、しかし言ってみれば自然なことだった。優衣の姿を重ねていたのは紛れもない事実だ。しかし自分の中ではちゃんと線引きは出来ているつもりだ。確かに唯は優衣にそっくりだ。まるで双子のように、いや、本物の優衣のようだ。しかし、だからといって優衣と唯が何かの関係があるかといえば別問題だ。いやいや、何かしら関係があるうとなかろうと二人は別々の人間。混同して考えたりはしない。

「祐樹でいいよ」

この一言を言うためにどれほどの緊張とどれほど激しい痛みを伴った鼓動を感じただろう。唯は少しだけ驚いたように眼を見開いて、そして微笑んだ。

「じゃあ、遠慮なく。祐樹君ね」

受け入れてくれた安堵感と、ようやく言いたかったことが言えたという嬉しさで、祐樹は大きなため息をついた。あの頃に一歩近づいた、そう思った。祐君と祐樹君、若干違うが。

「どうしたの？急に黙って」

唯が不審げに首を傾げている。慌てて回想を打ち消す。

「いや、正夢なんて経験したことあるかなって思い出してたところ」



「結果は？」

「・・・ないね、やっぱり。正夢なんてないのかな？」

「私はあるよ」

「ほんと？どんなの？」

唯がくすりと笑い、「内緒」と言つて立ち上がった。

「そろそろ帰ろうかな。祐樹君は？」

「じゃあ僕も帰るよ」

立ち上がり机の上に鞆を広げた。教科書や筆記具を放り込んでいく。唯はすでに帰宅準備は出来ていたらしく、祐樹が鞆の口を閉めたときには教室の扉の前に立っていた。

「早いね」

「そう？祐樹君が遅いんじゃない？」

そう微笑む唯。夕日が赤く照らすその姿は、祐樹に自分は夢の中にいるのではないかと錯覚させた。目が覚めると唯の姿も消えてしまふ。自分はまた彼女を失うのか、祐樹は、自分がそう考えてしまったことに気付いていなかった。小走りで近寄る。夢が消えないようにちゃんと捕まえないければ。

二人して自転車を押して歩いた。乗って帰れば唯の家まではあつという間だ。10分とかからないだろう。だが二人は歩いて帰った。どちらが提案したわけではない。自然とそうなった。しかし祐樹にとっては願ってもいないことだ。二人でゆっくり帰れる。あの時間が戻ってきた。唯は楽しそうに、ずっと笑顔で喋っている。その顔を見ているだけで祐樹の顔も綻んだ。大して面白くない話でも、きつと大笑いできるだろう。事実そんなことはなかった。唯の話す全てが面白く感じられた。それはつまり？

自分は唯が好きなのだ、そう気付いた。その瞬間顔が熱くなるのが分かった。唯はそんな祐樹の様子に気付く様子もない。今が夕日で良かった、祐樹は太陽に感謝した。あつという間に唯の家に着いた。壁の色も変え、庭の様子も違う。当たり前だ、ここは小林家ではなく大野家なのだ。少し寂しさを感じた。

「じゃあまた明日」

唯が笑顔で手を振る。祐樹も笑顔でそれに応えた。もしかしたらぎこちない笑みだったかもしれない。大丈夫、もう薄暗くなっている。祐樹は太陽に、本日2度目の感謝をした。

「どうも信じられないな」

智弘はコップの水を一気に飲み干した。夏前だというのにすでに蝉の泣き声はうるさく感じるほどだった。

「まあそれが普通の意見だろうね」

「だろ？住所も名前も一緒に上に見た目も声もそっくり。ドッキリカメラかつての」

「でもほんとにそっくりなのよ。見れば分かるわ」

3人がかりで言っているのに智弘はまだ信じようとしなかった。

「百聞は一見にしかずってか。じゃあいつか連れてきてくれよ」

「それいいね、じゃ、よろしく、尾藤君」

「え、僕？」

いきなり矛先を向けられて戸惑った。

「確かに最近仲いいらしいしね」

「転校してきてまだ2週間だろ？なかなかやるな祐樹」

「席が隣だから喋る機会があるだけだよ」

オレンジジュースのコップについた水滴を弄びながら視線を落とした。確かにこの2週間で随分仲良くなった。一緒に帰ったこともあるし。

「でもそんなに似てるならホント仲良くなって昔のようにこのメンバーで集まりたいな」

智弘がおどけた調子で言う。気を遣ってくれているのは分かった。祐樹も笑顔で応える。しかし響子も隼人もそれに倣わなかった。

「大野唯と仲良くなっても別物だと思うわよ」

「傍から見れば確かに昔のようではあるけどね」

智弘は何か言おうと口を開いたが、そのまま口を閉じた。沈黙が

流れた。しかしそれは重苦しいものではなかった。そう感じたのは最初のほんの数秒で、後は馴染んだ、むしろ心地よい静寂だった。1年という時間は意外なほど自分たちを強くしてくれていたのだな、祐樹はそう感じた。

「さて、と。そろそろ出るか？」

そう切り出したのは智弘だった。それを皮切りに皆が動き出した。支払いを済ませて外へ出る。むっとする熱気が全身を纏う。

「これからどうするの？」

「俺はちよつと買い物あるからここで」

「あ、私もあつちだから」

智弘と響子は二人並んでその場を後にした。

「二人で買い物？」

小さくなる二人の背中を見つめながら祐樹が呟いた。

「相変わらずの鈍さだね、祐樹君」

「何が？」

「気付いてないでしょ？あの二人が付き合ってるの」

え？と言おうとしたがその声すら出なかった。全く考えもしなかったことだった。隼人が「やっぱりね」と言っただけ息をついた。

「ホントに？」

「さ、用事のない僕らはさっさと帰ろうか」

さっさと踵を返してすたすたと歩き出す隼人。慌てて後を追った。

「え、いつから？いつから付き合ってるの？」

「いつでもいいじゃないか」

「何で知ってるの？」

「直接聞いてはいないけど、僕は祐樹君ほど鈍くはないので」

「言ってくればいいのに。何で内緒にするんだろ？」

隼人の目線に気付いてそちらに顔を向ける。中指の腹でくいと眼鏡を押し上げる。隼人が弁舌を披露するときの合図のようなものだ。「亡き恋人の影を見ている友人の前で、数年来の友二人が「私たち付き合います」って宣言できると思うかい？」

「それはつまり」

「君に気を遣っているってことだ」

「僕のことなんて気にする必要のないのに。大体友達だから気兼ねなく言えるんじゃないの？」

「まあ、最近は祐樹君も小林さんの影を追っている感じは少なくなつたようには見えるよ。理由はどうあれ」

「何か引つかかる言い方だね」

「他意はないさ」

鯛はない？じゃあ鰯は？なんちゃって。隼人が言葉を濁すなら祐樹もそれ以上追及しないことにした。

「隼人君はそんな浮いた話はないの？」

「浮く必要性を感じないからね、今のところは」  
これも追及する話ではないな。

図書館に行くという隼人と早々と別れてから、祐樹はまた思いを馳せた。幼馴染の笑顔の可愛い女の子。でも祐樹はその女の子の笑顔と同じくらいにふくれっ面も好きだった。周りを慮りいつも笑顔を振りまく彼女が、唯一自分にだけ見せてくれる特別な表情だった。「ゆいちゃん」と呼びかければ飛び切りの笑顔で振り向いてくれる仕草がいつまでも脳裏に深く焼きついていく。でも少しずつその姿が小さく遠くなっていく。手を伸ばしても届かないことは分かっている。寂しく見つめるだけだ。どんどん離れていく。そして、自転車に乗って帰ってきた。

「あら祐樹君」

初めて制服姿ではない唯を見た。白のＴシャツにベージュのハーフパンツ、明るい唯の性格にぴったりだと思った。

「大野さん、これからお出かけ？」

祐樹の言葉に吹き出した。

「お出かけて言葉久々聞いたよ。せっかくだしいろいろなとこ散策してみようかと思って。どこかお薦めのスポットとかある？」

祐樹は首を捻った。

「お勧めスポットねえ・・都会から来た人に勧められるようなものもないと思うなあ。見てのとおりちよつと街から外れればすぐ山や畑があるけど」

「山かあ、学校のちよつと先にあるよね」

「愛宕山だね。山頂からの眺めはなかなか綺麗だよ。今日は天気もいいし遠くの海まで見えるかも」

唯の顔がぱつと明るくなる。

「海見えるんだ。行ってみようかな」

「まあ自転車で登るのは無理だと思うけど、そんなに高い山でもないしね」

幼稚園時代に登ったときはとてつもなく高く感じたものだが。

それから少し他愛もない話をした。やがて唯が「そろそろ行こうかな」と切り出す。

「じゃあまた月曜日」

「うん、大野さんも気をつけて」

2、3歩進んですぐに立ち止まった。唯に呼び止められたのだ。振り返る。

「どうかした？」

「私は祐樹君って呼んでるのに祐樹君は私を大野さんって呼ぶですよ。バランス悪いかと思って」

「つまり？」

「唯でいいよ」

それは、数日前の祐樹の口調を真似ていた。しかし祐樹のように緊張してはいなかった。その代わりにとばかりの満面の笑み。

「じゃあ、唯ちゃん」

祐樹の応えに満足げに頷く。

「そういえば初めて会ったときもそう言ったよね」

「だったね。お恥ずかしい」

何と言っていいか分からず曖昧に笑顔を取り繕った。正確にはあの時言った言葉は「唯ちゃん」ではない。だがわざわざそれを言う

必要はあるまい。祐樹の仕草を見て、唯がふふふと笑った。祐樹もつられて二人してふふふと笑った。一瞬のためらいもなかったことに、祐樹はちよつと嬉しかった。

「休みはどうだった？」

こつこつ質問は苦手だった。休みでなければ平日は毎日優衣に会えた。だから祐樹は休日が嫌いだった。優衣がいなくなってからは？ 結局一日中優衣の面影を追ってしまつて却つて性質が悪かった。去年の冬休みと今年の春休み。

夏休みはあつという間に過ぎ去つていった。いつあつたのか分からないくらいに。振り返つてみればやつと「ああ、あつたのだな」と思い出せるくらいだ。はつきり言つてしまえば何の思い出もないということだ。時々いつもの面々で集まつた。皆で海にでも行こうかという案も出たが、智弘のバイトや響子の部活などで上手くスケジュールが合わず結局流れてしまった。

「君は？」

「休みどうだった？」の応えは決まつてこれだった。まさか一言も答えず返されるとは思つていなかったであろう唯は少し面食らい大きな瞳を更に見開いた。

「私？ そうだなあ、結局部活も入つてないしこれという思い出もなかったりして」

ぺろりと舌を出し照れたように笑う。その表情を見ながらぼんやりと考えた。久々に見る唯の顔にほつと癒される気がする。この笑顔に会いたいと思つていた自分に気付く。

「で、祐樹君はどうだったの？」

「僕もこれといった思い出はないよ。友達と遊びに行こつて言つてただけで結局都合が合わなくてなくなつちやつて」

「このクラスの人？」

「いや、中学のとき仲良かったグループ。川島さんもその一人だよ」  
「あ、理数科の。祐樹君に職員室まで送つてもらつたとき一緒にい

た子ね」

そういえばその集まりに連れて来いって言ってたっけ。結局一回も連れて行っていないどころか誘ってもいない。自分で思うにもうこんなに仲も良いしデートに誘うわけでもないから気後れしているでもないが、何故か誘えずにいる。でも連れて行きたい気持ちはある。あの頃のように5人で笑い合いたかった。

「いつか私も連れてつてくれない？」

「へ？」

思わず情けない声を上げてしまった。まさか誘いたい相手からそう切り出されるとは。

「違う学校の子と交流すればもつと世界も広がるかなと。だめ？」

「いや、いいよ。もちろんいい」

唯はその言葉を聞いて本当に嬉しそうに微笑んだ。その表情で祐樹は幸せな気分になる。これはやはり、自分は唯を好いているのだな。客観的に感じる事が出来た。でなければ今頃熟れきった林檎のような顔を唯に見られていたことだろう。それはそれで悪くないかもしれない。意思表示しているということだ。もちろん唯の気持ちとは分らないし、彼女を想うゆえに頬を染めたと気付かれないかもしれない。「あれ、顔赤いよ。熱でもあるの？」と言って白く柔らかな掌で額を触ってくるかもしれない。いや、せっかく想像なのだし、額と額で確認してくれないかな？そんなだったら照れてもつと赤くなってしまうだろうな。想像だけでも顔を赤らめてしまう。

「あれ、顔赤いよ。熱でもあるの？」

気付いたときには額に唯の温もりを感じていた。さすがに額ではなく掌だったが、それでも実際にそんなことをされると想像とは桁外れに緊張した。顔が熱くなっていくのが自分でも分かる。きつと真っ赤だ。

「だだ、大丈夫、デス」

「あら、でも結構熱いんデスけど」

その足で保健室へ。どうやら本当に熱があつたらしい。

「夏風邪かしらね。薬あげるから飲んで少し横になっておきなさい。それとも早退する？」

保健の安田先生の喋り方はゆったりとして心地よく響く。こんな美人なのに30代も半ばに差し掛かる今の今まで結婚していないのがこの学校の7不思議の一つだとも言われている。他の6個を祐樹は知らないが。

「あ、じゃあ寝ときます。すぐに良くなると思うんで」

「私は教室に帰るね。じゃあ祐樹君また後で」

「うん、ありがとう」

笑顔で保健室を後にする唯を見送って、ごそごとベッドに潜り込んだ。保健室はクーラーが効きすぎているのか少しひんやりとしていて、布団に包まれるととても心地がよかった。

小学3、4年の頃だと記憶している。急な腹痛で保健室に駆け込んだことがあった。そのときも薬を貰ってベッドで横になった。祐樹はあつという間に夢の中に入り、目覚めたときはここがどこなのか一瞬分からなくなった。

「おはよ」

突如視界に優衣が現れた。祐樹の顔を上から覗き込んできたのだ。びつくりしてわっと声を上げてしまった。

「優衣ちゃん・あ、僕保健室で寝てたんだ」

優衣がベッドの隣にあるパイプ椅子に座り直す。

「気持ちよさそうに寝てたよ、まるで家で寝るみたいに。ま、家でどう寝てるか見たことはないけどね」

優衣の冗談に笑みが零れた。それをみて優衣も嬉しそうに微笑む。

「もう元気になった？」

「うん、そういえばもう痛くないや」

「そう。それはよかった」

寝ている間に昼休みになったらしい。それから30分以上そこで喋っていた。



ふと気付くと優衣の姿がなかった。視界にあるのは見慣れない壁。いや、天井だ。そうか、いつの間にか自分は寝てしまったらしい。

「おはよ」

驚きのあまり息が詰まった。夢の続きか？

「優・唯ちゃん、いつからいたの？」

「今3時限目が終わって様子を見に来たところ」

あの時のように昼休みではないようだ。ちょっとだけ残念な気持ちが出た。

「気持ちよさそうに寝てたよ」

悪戯っぽく笑う唯。

「まるで家で寝てるみたいだった？」

「だね。と言っても祐樹君が家でどう寝てるかは知らないけど」

唯の言葉を聞いて、思わず笑ってしまった、ふふふと。それにつられるように、唯もふふふと笑った。

「ねえ、唯ちゃん」

「何？」

「昔の思い出を夢に見てさ、その後同じようなことが起こったら、それは正夢なのかな？」

突然のことで唯は話を読めないようだった。とはいえ微笑みは絶やさない。笑顔で祐樹に問いかける。

「何？急に」

「ちよっと前に言ってたでしょ、正夢を信じるか？って」

「ああ、あれね」

と言っ、それから首を捻る。

「思い出の正夢・それは、どっちかっていうとデジャヴじゃない？」

「デジャヴって、前にもこんなことあったなって感じるとかいうあれ？」

「それそれ。私が思うにね」

「じゃあ、あの質問の僕の答えは、正夢は信じない、だな。」

安田先生はいないのだろうか、物音もしないし気配もない。

「そっか。まあ考えは人それぞれってね」

「あ、でも唯ちゃんは経験があるって言ってたね」

「単なる偶然って言えばそれまでんだけどね。根拠も何もないし何となくムズムズする。一度断られたので聞きにくいとは思いつつも口にせずにいらなかった。

「その正夢ってどんな内容だった？言いたくなければ別にいいんだけど」

「しつこいと思われるかな？という心配もあったが、唯はその質問が来ると予測していたのだろうか、天井を仰ぎ思い出す素振りを見せた。

「正夢ってというか、そんなことあったらいいなっていう希望的なものだったのかもしれないけど」

と前置きをして、目線を落とした。

「私転校って初めてじゃないんだ、お父さんの仕事の都合でもう何回も引越しを繰り返してて。寂しくなるからあんまり友達を作らないの」

「そんなことないでしょ。皆と仲良くしてるじゃない」

「皆一緒、一見仲良いようだけど本当にいつまでも続くような友情は築けてないと思う」

唯は皆の前ではいつも笑顔だった。来るもの拒まず。話しかけてきた者全てに優しい笑顔を振りまいていた。初めてこんな憂い顔を見た。自分だけに見せる特別な表情、そんな言葉が脳裏に浮かんだ。「でね、いつの日からか、転校が決まるといつも同じ夢を見るようになったの。転入の挨拶をするときに、とある生徒が私を見て驚いて思わず声を掛ける。夢の中のその子の顔は分らないけど、私も同じように驚くの。運命的な再会を果たしたって」

「それは、言ってみれば僕がやったような？」

思い出すと今でも恥ずかしい。唯が大きく頷く。そしてこちらに顔を向けた。いつもの笑顔だった。

「初めて会ったんだし再会を果たしたってことにはならないけど、夢と同じような感じでしょ」

チャームが鳴り響いた。

「あ、やばっ。授業始まっちゃった。私行くね」

椅子から飛び上がり駆け出す。

「待って」

立ち止まり振り替える唯。揺れる髪がやけに綺麗に感じた。「どうしたの？」

「次って確か物理でしょ」

「ああ、岡崎先生って時間に厳しいんだっけ」

唯が大袈裟に苦い表情を見せた。

「僕も行くよ」

そう言っただけからでもそと這い出す。

「まだ寝てなよ」

「薬飲んで寝たし。もう大丈夫。遅れた言い訳にもなるでしょ」

そう言っただけふふと笑った。唯は少し考える素振りを見せたが、やがて祐樹と一緒にふふと笑った。

## 綱ヶ背橋の伝説

「祐樹君は綱ヶ背橋の伝説って信じる？」

「え？」

祐樹は思わず素っ頓狂な声を上げた。4年前と全く一緒だった。まるでいきなりその日にタイムスリップさせられてしまったような。

「どうしたの？」

唯は笑顔を崩さず少しだけ首をかしげた。祐樹はちよつとためらい、やがて意を決したように口を開く。

「つながせばしの伝説？何それ？」

唯は目を丸くした。よもやそんな応えが返ってくるとは思っていなかった、そんな驚きの表情だ。

「え、知らないの？」

知らないの？高田町に住んで何年になるのよ？

「愛宕山の麓に小さな祠があるでしょ？」

「初めて唯ちゃんの私服を見た場所だ」

「そうそう、あそこ。何だ、知ってるんじゃないの？」

今更やっぱり知ってますとは言えないか。白を切りとおすことにした。

「まああの山の祠くらいは知ってるよ。高田町に住んでちょうど16年目なわけだし」

「何に対する“ちょうど”よ？」

夕日に照らされる唯からはいつもと違う魅力を感じる。自分の笑顔は多分不自然に見えるだろう、そう感じた。だが幸い唯は気付かない。

「てかほんとに知らないんだ。有名な話かと思ったけど」

「誰かに聞いた話？」

「近所のおばちゃんに聞いたんだけど」と前置きをして、唯は講義

をする教授よろしく堂々とした態度で話し始めた。

「むかし昔から言い伝わっている伝説。愛宕山のあの祠の前には小さな小川が流れているでしょ？その川には石造りの古い橋が架かっているんだって。それが、今言った綱ヶ背橋ね」

そこで一度言葉を区切った。祐樹はこくりと頷き続きを促す。同じく満足気に頷く唯。

「その綱ヶ背橋の伝説ね。満月の夜、男女が手を繋いで月明かりに照らされるその橋を渡れば、その二人は永遠に結ばれる」

月明かりに照らされ、なんて件はあっただろうか？まあ所詮は口伝いの伝説だ、多少の変化はあるだろう。

「綺麗な伝説だね」

「だよね！」

窓の外に目線を移せば、11月も半ばを過ぎようというのに半袖短パンで、寒そうな素振りも見せず部活に勤しんでいる学生たちの姿が見える。結局祐樹も唯も何の部活動にも参加していない。

「何が言いたいか分かるかい？」

目線を唯に戻す。笑顔で小首をかしげている。とても可愛かった。思わず顔が綻んでしまう。

「一緒に行こうよ、と」

祐樹の言葉で唯は更に嬉しそうに笑う。

「冴えてるね」

「つまり、唯ちゃんはその伝説を信じるってこと？」

応えはすぐに返っては来なかった。そしてぺろつと舌を出す。

「聞いたいて自分がすぐに答えられなかったら世話ないね」

祐樹の隣の席に座る。そこは今や唯の席ではない。2学期に入っですぐに席替えがあり二人は離れ離れになってしまったのだ。祐樹は相変わらず窓際の席だったが。だから今でも授業中にこっそり窓の外を見る。

「信じたたって言うのが正直な気持ちかな？さすがに完全に信じるとは言えないけどさ。まあ色んな所に似た話はあるかもしれないけ

ど、満月の夜限定でとかすごいロマンチックな話だと思っし。他の縁結びの話と違って、有名などこどこ神社とか何々岬とかじゃないじゃん。地元だけでこっそり伝わってるって言うのもいいよね」

鞆に筆記具や教科書を放り込む。目線は唯を向いてはいなかった。「そろそろ出ようか」

唯の不満気な顔が目には浮かぶ。そちらは向かず、室内を軽く見渡す。

教室には二人を含め10人満たない程度学生が残っている。あまりこの手の話は人前でしたくはない。冷やかされるのも嫌だし、小学、中学来の同級生の耳に入るのは最も避けたいことだった。祐樹の目線に気付いてか、唯も立ち上がり鞆を手取る。

「OK。じゃあ帰りながら話そうか」

教室を出るとひんやりとした空気が全身を包む。思わず身をちぢこませてしまう。廊下には教室以上に人影がない。それがこの寒さを引き立たせているようだ。

「まるで恋人同士だ」

その言葉に他意はなかった。少なくともその時だけは。9月の半ばのことだった。唯から付き合ってくれと頼まれたのだ。もちろん、それは彼氏彼女の関係になっってくれということではなく、ありがちな“買い物に”付き合ってくれとの頼みだった。

「何の買い物に？」

「来週お父さんの誕生日なの。そのプレゼントを探しにね」  
喜びと同時に疑問も浮かぶ。

「いいけど、なんで僕に？」

「だって、お父さんの顔を知っているのは祐樹君だけだし」

祐樹はぼんやりと思い出した。たしか4ヶ月ほど前の夕刻時だった。愛宕山の麓、あの橋の近くで唯と両親に会った。

「優しそうなお父さんだったね」

祐樹の言葉に、唯は嬉しそうに微笑んだ。ああ、この子は父が大

好きなのだな、そう思った。そういえば最近祐樹の父は仕事が忙しく、夕食を共にすることが少なくなった。いつからか一緒に風呂に入ることもなくなり、それを当然に受け入れている自分がいた。幼い頃はずっと一緒に入りたいと思っていたのに。

「伝説は所詮伝説だよ」

夢がない、とか言って怒られそうだな。そう思いながらも祐樹はそう口にした。意外にも唯は不機嫌な顔を見せなかった。

「ただの伝説でも本当のことでもいいのよ」

「何の意味があるのさ？」

「こういうのって信じる信じないじゃないんじゃないかな。そういう伝説がある場所へ行こうって気持ちが必要なんだと思わない？」  
分かってないなあ。たとえばの伝説でも、そんな伝説のあるところ二人で行く、ってのが大事なんじゃない

「そんなもんかい？」

「そんなもんよ。夢がないなあ、祐樹君は」

あ、時間差で怒られた。思わずふふつと笑ってしまった。

「なんで笑うのよ？ねえ、それより結局どうする？」

祐樹はふと真顔に戻り、落ち着いたトーンで切り出した。

「そうだな、一つだけ言えることは、」

唯がこちらを注目し固唾を呑む。

「唯ちゃんの家に着いたよ」

何だそりゃ！ってね。唯はむっとしていた。

「祐樹君で意外とそういうの信じないタイプなのね。分かった。じやあまた日を改めてね」

手を振り唯を見送る。玄関に吸い込まれるように入っていく唯を見届けた後、祐樹は再び歩き出した。嫌でも先ほどのやりとりを思い返す。自分でも驚くほど戸惑っていた。綱ヶ背橋に誘われたことに対してではない。それはむしろ嬉しいことだと思う。しかし、この戸惑いは何だろう。

4年前のあの日を思い出す。今でも完璧に思い出すことが出来る。あの日交わした一語一句を一つとて零さずに。薄暗い夜空からは満月が明々と二人を照らしていた。自分の左手を見る。幼稚園以来お互い恥ずかしくてほとんど繋がなくなっただ手と手。数年ぶりに握り締めた優衣の手は、柔らかく、暖かく、幼稚園時代のイメージより若干小さく感じた。その頃は身長も祐樹の方が大きくなっていたのだから当たり前だろうが。その手の感触だってはつきり覚えている。この温もりを留めたまま、唯と橋を渡ることなどできるだろうか。最近日は落ちるのが早い。辺りは唯と別れる以前と比べてずっと暗く、寒く感じた。

「何それ？何の冗談？」

響子の語気はいつもより刺々しかった。

「どこかで聞いたらしくて」

「それはともかく、尾藤君は何て答えたの？」

「はつきりとは何も」

響子が信じられないという表情を見せた。思わず目を逸らす。

「何で答えなかったの？」

「何でって・・・」

「尾藤君言ったよね？付き合い始めたって。もう一ヶ月以上経つかな」

頷く動作もぎこちなかった。間違っではないし、しかしここで堂々と頷くのもおかしい。

「誰と？」

「え？」

「尾藤君は誰と付き合ってたんの？」

「・・・唯、ちゃん」

「私は苗字を聞きたいのだけど」

響子の言いたいことが分かってきた。でも、言われなくとも自分はもちろんと理解していたつもりだ。しかしこの気持ちは・・・



「そのゆいちゃんてのは何て苗字？」

「・・大野だよ、大野唯。分かってるさ、小林優衣じゃない！」

思わず語気が強くなってしまった。分かっていることを回りくどく言うな、という怒りではなかった。自分に対する苛立ちだ。

「でも尾藤君は綱ヶ背橋の話を聞いて何も言えなかったんでしょ？本当に大野唯さんが好きなら一緒に橋を渡りたいって気持ちは出てくるんじゃないかな？」

何も言い返せなかった。そうだ、自分はいつの間にか、いや、もしくは初めから、分かっているつもりで、しかし実際は唯に優衣の影を見ていたのかもしれない。だから自分はこれほどまでに戸惑ったのだ。共に綱ヶ背橋を渡った優衣が再びそんなことを言うわけがない。この子は唯であって優衣ではないのだ、そう現実を突きつけられたような衝撃を受けたせいなのかもしれない。だから自分は戸惑い、何も答えられなかったのだ。

「尾藤君、実はね・・」

しばらく間を置いて響子が口を開いた。

「智弘と付き合ってる、でしょ」

響子が目を丸くするのが分かった。何故それを知っているのだ、そんな表情。

「どうせ僕は鈍いから気付かないだろう、そう思ったんでしょ」

「違、そういうつもりじゃ・・」

「恋人を失って可哀相だから黙っておこうと。それは友達としての気遣いなのかな？同情のようにも感じれるよ」

自分でも困惑するほど、とめどなく言葉が溢れる。

「止めてよ。そんなつもりじゃないってば。第一関係ないじゃない」「関係ない？何だ、友達と思ってたのは僕だけの勘違いだったってわけだ」

「違うよ、それと今の話は関係ないって意味よ」

お門違いは分かっている。話をすり替えて、自分への苛立ちのはけ口を作っているだけだ。でも自制ができなかった。

「川島さん、彼氏によりしく伝えといて。友達じゃない僕はもうあのメンバーで集まるのは止めるよ」

「ちよつと・・・」

捨て台詞のように、荒々しく吐き捨ててその場を後にした。自分がどうしようもなくちつぽけな人間に思えて、涙が溢れそうだった。優衣の死に対してこれっぽっちも流れなかったくせに。そのことにまた腹が立った。

「どうかしたの？」

唯が机の前にしゃがみ、顔だけ机の上に出している。祐樹は、巢穴から顔だけ覗かせている小動物を連想した。

「なんで？」

出来るだけ笑顔を取り繕った。

「なんとなくね。ちよつといつもと違う感じがしただけ」

唯はそれ以上聞くのをやめた。どうせ自然な笑みなど出来てはいまい。唯の気遣いに感謝した。

「それで、どうするの？」

綱ヶ背橋のことだろう。まだ気持ちの整理がついていない。しかしこれ以上応えを引き伸ばすことも、まして断ることなど出来ない。「次の満月はいつかな？」

「13日後よ。再来週の水曜ね」

唯は笑顔で即答した。その顔が見ただけで、自分は間違っていないと思える。唯が笑ってくれるなら自分がどう思っていようがいんじゃないか？

「月末だね。そうなればあと一ヶ月で今年も終わるんだ」

話を変えたかった、そんな考えはなかったが意識下ではそんな気持ちがあつたかもしれない。

「早いね。付き合い始めたころはTシャツでよかったのに」

「ああ、あの頃ね」

唯の言葉である日に戻った。夕焼けに紅く染まった教室で、二人

きりだった。

「お父さん喜んでくれたよ。ありがとね、付き合ってくれて」

唯が切り出した。父の誕生日プレゼントと一緒に探した礼だ。

「気に入ってくれたならよかった」

いつもと同じだった。放課後に教室に二人になることは少なくなかった。ただ、唯の様子だけが違った。でも祐樹は気にしなかった、というより鈍いせいであまり気にならなかったというべきだろうか。

「祐樹君、」

今度はどんな話題を出すのだろう、その程度の気持ちだった。

「あの、私と付き合ってくれないかな？」

「今度はお母さんのプレゼント探し？」

「いや、そういう意味じゃなくてね」

「え？・・あ、買い物じゃないんだ。えと、じゃあ何に？」

「何について言うか、だから私と」

「・・あ、あゝ」

と言ってから後悔した。何て間抜けな返事だ。気付くまでもなんと間の抜けた返しをしていた。付き合って 何の買い物に？ 買い物じゃなくて じゃあ何に？って。

「に、鈍いにもほどがある」

恥ずかしいことこの上ない。夕日に負けなくらい顔を赤らめた。

「まあまあ、私の言い方も悪かったよ」

「ごめん、感動的な場面のつもりだっただろうに」

「まあ、この3ヶ月で祐樹君の性格は大体分かってたつもりだから」

「・・それ、もしかしてこうなるかもって予想はあったってこと？」

唯はぺろつと舌を出した。

「なんか残念な始まりだね」

「そんなことないよ。なんて言うか、らしくていいんじゃない？」

そう言っただけはふふと笑った。祐樹も、唯に倣ってふふと笑った。

今思い出しても可笑しくなる。ふと気付けば口元が少しばかり弧

を描いている。

「いつの間にかつてのは僕らの定番か」

「え？」

「優衣ちゃんとはそんなやりとり自体なかつ・・・」

はつとして口を嚙む。ほぼ無意識に口から出ていた。唯がきよんとしている。

「私とは、何？」

「あ、いや。ぼーっとして何か変なこと考えてた」

「何それ？『あの頃ね』って言うからてつきり思い出に浸っているのかと思いきや」

祐樹は若干大袈裟に笑ってごまかしたが、唯はいまいち腑に落ちていない様子だった。そしてふと気付く。こんなに優衣のことを口にしまいとしているのは何故だ？今はいない元彼女。話したって問題はなさそうではあるのに、自分は頑なにそれを拒んでいる。唯に知れたらどうなる？その子にそっくりな私は、つまりその子の代わりとして見られているのではないか、と？そんな考えが浮かぶのはやはり自分自身が心のどこかでそう思っているからではないのか？少なくとも全くその考えがないということはないのだろう。シヨックだった。自分の気持ちが信じられない。自分は唯のことが好きだし、しかしその真意は何だ？100%唯だけに惹かれているのか？それとも優衣に外見も性格もそっくりだから惹かれているのか？

ま、とはいえあの優衣ちゃんとは別人なわけだし、だろ？

ファミレスでの智弘の声が蘇る。分かつてるよ、吐き捨てるように呟く。僕だつて分かつてるさ。でもこれほどまでに似ていたら・・・

本人かと思つたって？彼女は大野唯本人だよ。そうだろ？

隼人が冷めた口調で言う。その一瞬だけだったろうか？セミの鳴き声は聞こえなかった。急に黙り込んだせいだろう、唯が訝しげにこちらを見ている。そんな眼で見ないでよ、ユイちゃん。

優衣と二人の空間と同じくらい、自分の部屋で一人きりになるの

が好きだった。そこでぼんやりと音楽を聴くのだ。窓の下の棚においてあるミニコンポは何の音も発しない。上面にはうつすら埃を被っていた。一年半くらい動いていない。そう、優衣が遠くへ行ってしまったあの日以来だ。今日もやはり、それを起動させる気は起こらなかった。階下では母が夕飯の支度をしているだろうがその音も一切聞こえてこない。ここにあるのは静寂だった。椅子に座り、その静寂を享受する。突っ伏してしまいたかったが体がそれを許さない。机に肘を突いたまま空を見つめていた。ふと視線を感じて頭を上げる。卓上の本棚に腰掛けた天使と目が合った。天使は楽しそうに微笑んでいる。少しだけ気に障る。僕がこんなに落ち込んでるのにお前は何も言葉を掛けないで笑っているだけか。手を伸ばし、抱きかかえる。天使にもコンポ同様うつすらと埃がかかっていた。優衣がせつせとこれを縫っている姿が脳裏に浮かんた。それだけでこの少し不恰好な天使がすごく愛おしくなる。僕はやっぱり間違っているのかな？唯ちゃんを唯ちゃんとして見ていなかったのかな？お前はと思う？天使は依然として微笑みを浮かべている。そつと、天使を元の場所に返す。バランスを崩して倒れた。この置き方も悪くないな、そう思った次の瞬間、優衣の姿とダブった。真新しい木造りの箱の中で眠る優衣と。慌てて置き直す。鼓動が早くなっていた。今はここにいられない。駆けるように階下へと急いだ。

「女を泣かすのは最低だつて聞いたことないかい？」

「それも本からの知識？」

顔を上げて相手の顔を見上げる。そして驚いた。

「隼人のそんな険しい顔初めて見たよ」

「川島さんに聞いた。何八つ当たりしてるんだ」

視線を窓に映す。ばつの悪さを感じたせいか、隼人の方を向いていらなかった。

「八つ当たりってつもりじゃなかったんだけど」

「君がどういう考えで彼女と付き合ってるかなんて僕にはどうでも

いいけどさ。友達を傷つけるのは黙ってるわけにもいかないだろ」

「悪いことしたとは思ってるよ」

「彼女だって何も君を批難しようとして言ったんじゃない。君のことを思ってる行為だ」

隼人の芝居がかった言い回しが可笑しかった。

「小説の一節でありそうな言葉だね」

「だけど本当のことだ」

分かってる、窓を向いたまま頷いて呟いた。

「僕はどうすればいいんだろ？」

唯はトイレだろうか、教室には不在だった。そのおかげでこんな話も出来る。多分隼人が配慮してその時に来てくれたのだろう。

「綱ヶ背橋のことなら川島さんから聞いたよ。あと言伝も預かった」  
「言伝？」

そこでようやく、隼人に目線を戻した。

「彼女は、誰から綱ヶ背橋の伝説を聞いたって言ってた？」

「えっと・・・たしか近所のおばさんとか」

「覚えてる？彼女の近所に、川島さんの親戚が住んでるって言うたろ」

「ああ、だからいち早く唯ちゃんのことを聞けたんだよね。え？もしかしてそのおばさんが？」

こくりと頷く。

「彼女に綱ヶ背橋の伝説を聞かせたのが川島さんの叔母さんなんだって」

「それは、また、奇遇なことだ」

「奇遇だと思うかい？わざわざそれだけを知らせてどうするんだ。ちゃんと続きがある」

つまり、響子の叔母が唯にその伝説を話したのはただの世間話の一つのつもりではなかったと？

「川島さんが叔母さんに頼んだんだ。彼女に綱ヶ背橋の伝説を話してくれって」

周りの雑音が一瞬にして消えた。しばらく声を発せなかった。

「・・・か、え？川島さんが、頼んだ？」

隼人がゆっくりと頷く。

「何それ？意味が分からないんだけど」

響子が叔母を介して唯に綱ヶ背橋の話を読んだ。そのことを頭の中で反芻していると、じわじわと怒りが湧いてきた。

「川島さんはどういうつもりなの？僕に嫌がらせをしようとする？」

「そんなわけないだろ。彼女なりの考えでそうしたんだ」

「どう考えたらそうなるんだよ！」

勢いよく立ち上がった。椅子が軋みながら後方へ倒れた。教室内の数人がこちらを見ている。そんなことは気にならなかった。隼人の表情は依然として冷静さを保ったままだ。一度深呼吸してから開口した。

「現にこうして僕は悩んでる。川島さんならこうなることは簡単に予想できただろ」

「だったらきつと君に悩ませようとしたんだろうね」

「悩ませて、その姿を見てほくそ笑むって？最低だよ、そんなの」

倒れた椅子を立て直し、今度はそつと座った。

「そのつもりならわざわざバラす必要があるとは思えないけど」

「え？」

「自分が大野さんに綱ヶ背橋のことを教えさせたってことをさ。わざわざ君に言って何の得になる？嫌がらせのつもりなら黙っていた方がいいだろ」

「じゃあ何でこんなことを・・・？」

「それは自分で考えるべきだね。もしくは本人に直接聞いてみれば？ともかく今は時間切れだ。じゃあね」

そう言い残し去って行った。隼人が教室を出ると、入れ違いに唯が入ってきた。何となくばつが悪く、思わず眼を逸らしてしまった。

結局、響子の言わんとしている事が分からぬまま数日が過ぎた。

満月が近づく。いまだはつきりと気持ちを決められないでいた。唯は自分と綱ヶ背橋を渡りたいと言ってくれているのだ。そんな彼女を悲しませる道理はない。しかし一方でこつこつ考える。そんな後ろ向きな考えで渡っていいのか？もちろん、橋の伝説が真実かどうかなど分らない。優衣も、唯も言っていた。これは気持ちの問題だ。100%唯のことだけを考えていられない以上、彼女と橋を渡ることとは何の意味もない。むしろなおさら、自分の心の中で彼女を傷つけていることになるのではないか？だったらいつそ、悲しませてでも今回は見送るべきなのではないのか。しかし彼女の悲しそうな顔は見たくない・・・

堂々巡りだ。周りが急にざわつき始めた。何事かと辺りを窺う。数学教師の武田が教室を出て行く。いつの間にか午前の授業が終わっていたようだ。チャイムすら聞こえなかった。ため息をつきつつ両手で顔を擦る。

「お疲れ？」

声を聞いただけで幸せな気分になれる。笑顔で顔を上げる。いつものように机越しに微笑みを与える彼女を、天使の様だと思った。お弁当を手にした天使。

「勉強は苦手だね」

「私も。肩凝るよね」

「年寄りみたいなこと言うね」

「失敬な！まだまだピチピチよ」

「今度はおじさんみたいな発言だ」

二人して笑った。いつものようにふふふ、と。

「もうすぐ満月だよ」

優しいな微笑だった。まるで何かを諭す母のような。いや愁いを帯びた、大人びた表情。

「・・・うん」

力強く頷いた。これでいいんだ。僕は唯ちゃんが好きだ、それでいい。



「行こう」

唯も頷いた。しかし先ほどの笑顔ではない。もつと嬉しそうに、  
というわけではなく、その逆だった。真剣な顔つきだった。内心戸  
惑った。何故はつきりと返事をしたのによるこんでくれないんだ？  
「ひとつ、聞いてもいいかな？」

「・・・もちろん。何？」

唯は思案するように少しだけ目を泳がせ、そしてまっすぐこちら  
を見据えた。

「天使の縫いぐるみは今も大事に飾ってある？」

## 天使と手紙

「祐君は天使って信じる？」

優衣の声だろうか？それとも唯？そんな判断もつかないの？やっぱりあなたは二人を別々に見てはいなかったのよ。咎めるような響子の声。智弘と隼人の声は聞こえなかった。

唯に天使の縫いぐるみのことを聞かれて、どうやってここに来たか覚えていない。唯に何と答えたかも。校庭の、一番大きな木の下。隼人がいつも読書をしている場所だ。まだ食事なのか、いまは誰もいない。何故自分はここに来たのか、きつと誰かに説明して欲しかったのだ。一体どうなっているのか、自分はどうすればいいのか。探したよ」

後ろから声を掛けられた。唯の声でも隼人の声でもない。振り返る。

「安藤君」

義信は無表情でこちらを見ていた。4年前以来、あまり彼の笑顔を見ることはなくなった。

「彼女、聞いてきたか？」

何の話か分からず黙っていると、義信は浅くため息をついて再び口を開いた。

「天使の縫いぐるみの話だ」

口を開くが声は出ない。なぜ義信が縫いぐるみのことを知っているのだ？

「驚いたか？大野唯には俺が喋ったんだ」

「な、なんで・・・」

「お前が煮え切らない態度だったから気になったんだろ、彼女は彼女なりに調べてたんだよ。全部話した、小林優衣の存在も、お前と二人で綱ヶ背橋を渡ったことも」

首を振る。声どころか呼吸すら難しかった。

「驚いて声も出ない、か。悪いとは思ってたけど、お前だけ秘密を持っているのは不公平だと思ってるね」

「それも、驚きだけど・・・」

ようやく声が出た。

「安藤君はなんで縫いぐるみのことを知ってるの？」

義信はじつと祐樹を見据えた。黙ってはいるが覚悟は出来ているようだ。祐樹は逸る気持ちを抑え、急かさずに待つことにした。やがて、口を開いた。「俺だけ秘密を持っているのは不公平だな」と前置きして、話し始めた。あの悲劇の夜の出来事を。

その日、義信は夜道を一人歩いていた。塾の帰りだった。7時過ぎ。何気なく空を見上げた。星はいつもより見えなかった。雲が掛かっているわけではない。月は丸々と太って、円に近かった。満月か。満月を見るといつも切ない気持ちに襲われる。原因は分かっている。仕方のないことだとも分かっている。でも、理屈だけでこの気持ちを抑えるには自分は幼い、ということも分かっている、つもりだ。右手に公園が見えてきた。いつもなら何も考えず素通りしてしまう、小さな公園。小さい頃はよく母と遊びに来ていた。ちょっとだけ寄ってみることにした。小さな街灯は、自らの足元を照らすほどの力しか持っていない。しかし今夜は月が明るい。いつもなら入るのを躊躇う小さく薄暗い公園も、今夜はすんなり義信を受け入れてくれた。その時だった。キッ、キッ。左手から金具の軋む音。背中にひやりとしたものを感じた。もしかして、幽霊の類か、目を凝らす。二つあるブランコのひとつが揺れている。二つ揺れていないということは風ではない。公園の暗さに目が慣れてきた。人の姿が見える。女の子だ。女の子の霊か？おっかなびっくり近づいていく。だんだんと姿がはっきりしていく。

「優衣ちゃん？」

「わ、びっくりした。あら、義信君。どうしたの？こんな時間に」

「塾の帰り。優衣ちゃんこそこんなとこで何してんのさ？」

「受験勉強してるとお腹空いて来ちゃうよね。で、これ」

そう言って傍らのビニール袋を掲げて見せた。コンビニのロゴが描かれている。照れ隠しだろう、ペロツと舌を出し首を竦める。とても可愛い仕草だった。それが余計に義信の虚しさを誘う。

「月が綺麗だからついでに見てたの」

「夜に一人でいると危ないよ」

「大丈夫よ。ちゃんと防犯ベルも持ってるし、こう見えて武術の達人なのよ。とりゃ!」

ブランコから飛び降り、それらしいポーズをとる。「なんちゃって」と、またペロリと舌を出した。思わず吹き出した。優衣も一緒に笑う。

「俺は満月が嫌いだよ」

ひとしきり笑い、そして言った。

「あら、どうして?」

真剣な表情で優衣を見つめた。

「前にも言ったけどさ。俺は今でも優衣ちゃんが好きなんだ」

前回この台詞を口にしたのは中学に上がる前だった。そのときよりも緊張もせず、スマートに言えた。

「ごめんね。私も前にも言ったけど、約束した人がいるの」

「何なんだよ、約束したって。所詮はただの伝説だろ。科学的根拠も何もありません」

つい語気が荒々しくなってしまった。

「分かってるよ」

義信とは違い、優衣の声は冷静そのものだった。諭すように言葉を紡ぐ。

「私だってそこまで子供じゃないんだし。伝説は伝説でいいの。その願いが叶おうが叶うまいが、少なくとも二人の気持ちは強くなることは確かでしょ。その思いがなければ伝説を信じようなんて思いもしないでしょ」

優衣に言われずとも、そんなことは分かっているつもりだった。

でも黙っていられないのだ。それだけ自分は優衣のことが好きだという証でもあった。

「祐樹と俺と何が違うんだ？」

「違うところはたくさんあるわね。義信君は頭いいし、スポーツは万能だし」

「じゃあいいじゃないか」

「あ、でも長距離走は祐君の方が早いかな」

「早い男が好きってんなら祐樹より早くなってやる」

優衣が笑った、と言っても微笑む程度だった。

「勉強もスポーツも関係ないよ」

「祐樹の方が俺よりも優しい？」

「義信君も十分に優しいと思うよ？そういう、言葉に出来るものじゃないのよね」

「言葉に出来ないって・・・」

「義信君はどうして私のことが好きなの？」

「それは、」

少し照れくさかったが、躊躇うわけにはいかなかった。

「皆に優しいし、勉強だって運動だって出来る。可愛くて、それでいてそれを鼻に掛けない。それから、」

「じゃあさ、その条件に合う人がいたらその人たちが皆を好きになっちゃおう？」

「それは、理屈はそうかもしれないけど、でも何か違うと思う」

「でしょ。理屈じゃないのよ、きつと。私だって偉そうなこと言えないよ、分かっている風なこと言ってるけど何で祐君が好きなのかなんて自分でも100%説明することはできないし」

沈黙が訪れた。何も言えなかった。ここで引き下がりがたくない、その気持ちは大きいはずなのに、優衣の言っていることが分かる。だからこそ言葉が出てこなかった。

「最近ひとつ気付いたのはね、」

一呼吸置いてまた話し始めた。

「天使の縫いぐるみを作ったの」

唐突な始まりだ。何の話だろう？

「私しか知らない祐君だけの天使。誰かに何かをプレゼントするって自分も嬉しくなるよね。その喜びが大きいのは、それだけその人が好きってことなんだなって気付いた」

相槌すら打てなかった。自分は、欠片ほども優衣の心の中にいないのか。

「さて、そろそろ帰ろうかな。じゃあまた明日ね」

優衣が歩き始めた。ついていこうとするが足が動かなかった。自分やはり優衣を繋ぎとめることはできないのだ。ここで素直に引き下がるのが男らしいのだと思う。でも負けたくない。祐樹に、弱気になっている今の自分に。歯を食いしばり、ようやく一步を踏み出した。公園の入り口まで辿り着く頃には、優衣は既に目の前の横断歩道を渡っているところだった。情けないと思われようとも構うものか。

「優衣ちゃん！」

立ち止まり振り替える優衣。笑みを湛えたその姿はとても明るく見えた。錯覚ではない。それは、トラックのヘッドランプだった。

話し終わった義信の顔は苦しみに耐えているかのように歪んでいた。当時の光景を思い出したのだろう。

「何それ？なんで今まで」

「もちろん警察には言ったさ。でも結局は居眠りした挙句信号無視したトラックの運転手の責任だ。それが原因で責め立てられたり、最悪いじめに繋がるとでも思ったのかな、これは誰にも喋らない方がいいと言われて、実際そうしてた。そのことは優衣ちゃんの両親にも伝わってないらしい」

「それでも、僕には教えて欲しかった」

自分は優衣の彼氏だったのだから。

「もちろんお門違いなのは分かっているけど、それを承知であえて言

うと俺はお前が好きじゃない。好きな子を取られたわけだし」

「逃げの口実じゃないの？」

そつえば義信は優衣の葬儀に参加していなかったな、そんなことを思い出した。

「誰かに言いたいなら言えいい。俺は今までもずっとこのことを一人で抱えてきた。俺のせいで優衣ちゃんが死んだのだと責められた方がずつと気が楽だと思つてたよ」

祐樹は義信から目を逸らした。この感情は怒りか、悲しみか、自分でも分らない。

「確かに言い訳に聞こえるかもしれないけどさ、俺は自分が優衣ちゃんを殺したようなもんだと思つて、今でもな。だからあえて黙つておくことを選んだんだ」

義信は今ですつと自分を責め続けてきたのだろう。そのことは伝わった。でもやはり納得できなかった。義信のせいというわけではない。それでも責めたくなる。責めたところで気が済むわけでもない、ということも分かつてはいるのに。

「僕が嫌いだろ？が何だろうが黙つてるのはおかしいでしょ。自分を苦しめるとか言つて結局皆に責められるのが怖かつたんだ。卑怯者だ」

「俺は多分一生あの時の光景を忘れないんだろうな。心底笑えることなんてないかもしれない。卑怯者か。お前に言えるのかよ？」

「え？」

突然矛先を向けられて戸惑った。

「何が？」

「お前、大野唯を何だと思つてるんだ？小林優衣の生まれ変わりが？それとも、ただの代わりか？」

「何言つてんの？大野唯ちゃんは大野唯ちゃんでしょ」

「橋を渡るんだって？」

ぐつと息を呑んだ。別にいいでしょ、と言うその声は擦れていた。いいな、数年前を思い出すだろ？彼女と渡つた時の思い出をさ」

「何が言いたいのか？」

「俺は小林優衣の影を一生見ていくかもしれない。しょうがないさ、それくらいは報いは当然だと俺は思ってる。彼女を死なせたようなもんだからな。でもお前は、彼女を忘れて前へ進んでいくんだな。ほんと強い奴だよ」

義信は寂しげに、うつすらと笑った。その自虐的な態度が氣に障った。

「優衣ちゃんを忘れるなんて出来るはずないだろ」

そっか、と呟いて、義信は一步踏み出した。そっと、しかし力強く祐樹の胸倉を掴む。

「ふざけるなよ。そんな気持ちで橋を渡るってのか。それはつまり小林優衣の心も大野唯の心も軽んじてるってことだろうが」

「そんなつもりじゃ・・・」

「じゃあどんなつもりだ？」

義信の氣迫に圧されたこともあり、祐樹は何も言えなかった。

「ちゃんと考える。生半可な気持ちのせいで二人の心を踏みにじるようなことになれば許さねえぞ」

義信はそう言って手を離し、祐樹の襟元を正した。そして、祐樹を残しその場を後にした。

『前略 お元気ですか？』

というのも変かな？僕は元気でやってます。手紙なんて書いたことないから何を書けばいいのか。（笑）似合わないかな？それでも僕なりに考えてみたんだ。』

あれから唯とはまともに会話をしていない。2日が過ぎ、氣付けば満月は今日だ。

休み時間の度に廊下に出た。3時限目が終わり3度目の廊下での休み時間。目の前を通る生徒や教師を何気なく眺めていた。

「尾藤君」



声の方を向く。響子だった。ぎこちなく笑みを作った。響子も同じだった。

「あの・・・この前は、ごめん」

「いいのよ。私も悪かったわ」

「いや、川島さんの言う通りだったんだ。多分僕は、大野唯を見ていないところがあったと思う」

そう、と言う響子の口調は、幾分優しくなった。

「それで、どうするの？」

「天使はさ、色んなところを飛び回って皆に幸せをくれると思うんだ」

響子が首を傾げる。構わずに続けた。

「僕は懂れていたんだろうな、そんな天使が羨ましいと思ってたんだ。自分も天使になりたい。それと同時に、天使にずっと自分を見てほしいと思った」

「・・・だけどそれは叶わない願いね」

こくりと頷いた。

「皆の天使だからね。独り占めはできない。例えば始めは僕だけの天使だったとしても、それを抱えたまま更に幸せをもらうことは出来ないんだ」

「新たな幸せをもらうために、あなたは、どうするの？」

その問いには、笑顔だけで答えた。

「祐樹君」

教室に入るなり唯から声を掛けられた。

「今日だよ」

唯の声はそれほど嬉しそうではない。優衣のことを知った今、彼女の思いもまた複雑なのだろう。

「うん。分かってる」

「私、放課後まっすぐ橋のところに行くね」

「うん」

「じゃあ、またそのときにね」

それだけ伝えたと唯はさつと踵を返し自分の席に戻っていった。

昼休み、例の大木へ向かった。隼人が読書をしている。祐樹に気づいて目線を手元からこちらへ向けた。

「邪魔してもいい？」

「こう見えて僕は友達には優しいのさ」

少し横にずれ、スペースを作ってくれる。隣に並んで座った。

「今までの人生で一番悩んだ一週間だったよ」

「『前に進むも留まるも、どちらも過ちではない。自らの決断でないので過ちだ』。僕の今のお気に入りの言葉だ」

「いい言葉だね。結果じゃなく行程が重要だと」

隼人がおもむろに文庫本を開いた。目線を落とす。反対に祐樹は空を仰いだ。

「今日はいい天気だよ。満月もよく見えるだろうね」

「月光浴とはいい趣味だ」

隼人も今夜のことは知っているはずだ。敢えてそれに触れないでくれるのはちょっと嬉しかった。

『自分では成長してるつもりではいるよ。君が見たら大したことないって言うかもしれないけどさ。確かに、君がいなかったら今の僕はないと思う。一人じゃ何も出来ない小さな子供だった。今でも大差無いかもしれないけど（汗）』

午後の授業は早かった。期末試験も近い今日、教師も生徒たちも黒板に、ノートにせっせとペンを走らせる。祐樹もその一人だった。ルーブリーフなんて風情の欠片も無いな、でも僕らしくていいかな。そんなことを考えながら。一文字一文字丁寧に綴っていく。文を書くのは苦手だった。何度も何度も書き直した。自分はやり遂げなければならぬのだ、そんな大袈裟な妄想を抱きつつ。斜め前に座っている唯の横顔を見る。教師の話を真剣に聞くその表情はやはり優衣とそっくりだった。そんなことを考えている自分に気付いて、し

かし祐樹は動じなかった。この数日で自分は大きく変わったと思う。優衣と唯は違う人間だ。そんなことは誰が見ても明らかだ。そのことに固執するあまり逆に自分を誤らせていたのだろう。素直に事実を受け入れれば無駄に苦しむこともなかった。それに気付くのに時間がかかった。でももう大丈夫だ。自分で書いた文を読み直し、また消しゴムを手に取った。

『全部覚えてる。小さい頃からずっと一緒だった。何もかもが初めてで不安だった僕をいつも支えてくれてた。大きいことも小さいことも僕の胸は全部抱えてくれてる。天使は僕の中では今でもあのままの姿なんだ。キューピーちゃんって言ったらまた怒られるかな？  
(笑)』

放課後、クラスメイトたちは慌ただしく部活や帰宅の準備をしている。唯はいつもどおり、教材を一つ一つ丁寧に鞆に収めていく。

「唯ちゃん」

ゆっくりと振り返ったその顔は、心持ち緊張しているようにも見える。

「すぐ出る？」

首を振る。綺麗に切りそろえられた前髪が左右に揺れ、それをすごく可愛いと思った。

「もう少し残ってる」

「僕は一度帰るよ」

その言葉は、自分の気持ちを表しているつもりだった。しかし唯は少しだけ微笑み、「うん、待ってる」と呟いただけだった。

吐く息が白い。しかし体は全く寒さを感じなかった。祐樹は息を切らしながら自転車を漕いだ。唯がいつ教室を出るか分からないが、この寒い中ちよつとでも待たせたくない。焦りにも似た気持ちだった。何を考えているのだろう？あの日のように唐突に、大事なものを失ってしまうような不安？とにかく急いだ。一秒でも早く唯の下



「温かい」

唯の顔がちょっと綻ぶ。それから、ようやく顔を上げてくれた。

「今更こんなこというのも都合のいい人間と思われるかもしれないけど、無理はしてほしくないよ」

祐樹は微笑み、頷いた。

「無理してるわけじゃないよ。ちゃんと考えた。僕こそ勝手だったんだ。都合のいいように唯ちゃんを見ていたんだと思う。ごめん」  
時に唯として、そして時に優衣として。

「暗くなつたね。満月がはつきり見えてきた」

唯が少し嬉しそうに、少し不安げに見つめる。

「一緒に渡してくれるの？」

「そのために来た。自分の意思で。唯ちゃんとこの橋を渡りたいと思つたから来たんだ」

ありがと、と呟くのが聞こえた。唯の表情はもはやはつきりとは見えない。でも声は先ほどより柔らかかった。

綱ヶ背橋に目を馳せて驚いた。月の光が照らし、あの古びた橋は神秘的なほどに綺麗に輝いていた。あの日の橋は思い出だからあれほど綺麗に感じていたのではないのか。唯も目を丸くしていた。

「すごい。さつきまで普通の古い橋だったのに。きつと満月のときだけこんなに綺麗になるから綱ヶ背橋の伝説ができたのね」

手袋を外した。ここぞとばかりに冷たい空気がそこを責める。手がぴりぴりと痛んだ。照れて躊躇ってしまわないよう、一気に唯の右手を掴んだ。冷たかった、でも痛みは止んだ。

「行こう」

「改めて思い返した。君はいつも僕の前にいた。どんなときでも僕を引っ張ってくれた。こんな情けない男をよく飽きないでくれたなと今更ながら思うよ（笑）」

ようやく気付いたんだ。そんな君は、今だって僕の後ろにはいない。君はやっぱり僕の前にいる。きつと笑顔でこっちを見てくれる。

毎朝僕を迎えてくれたように。」

せーので一歩踏み出した。お互いの体も月明かりに照らされる。唯の笑顔はまぶしいほどだった。目で促し、二人はまた進み始めた。一歩進むごとに鼓動が早まる気がした。新しい世界へ。そんな大袈裟な気持ちにはならなかったが、しかし確かに橋を渡っているという認識は、祐樹の心を暖かくしてくれた。

橋を渡り終えると周りの木々の陰になる。徐々に目を慣らし奥へと進む。橋同様古ぼけた祠。そこで一旦唯から手を離れた。

「ちよつと待つてね」

背中のリュックを下ろしチャックを開ける。

「何をするの？」

中から取り出したもの、それは縫いぐるみだった。優衣がくれた、あの天使の縫いぐるみ。

「これって」

「3日前に唯ちゃんが聞いてきた例の縫いぐるみだよ」

祠の正面にそつと座らせる。

「まさか、ここに？」

頷いた。続いて便箋を取り出す。薄明かりで見る金魚の絵はなかなか風情があつた。抱えさせるように天使の膝の上に乗せた。

「それは？」

「ラブレター、みたいなものかな」

唯はそれ以上問わず、じつと祐樹と天使に目を馳せていた。祐樹が立ち上がり、唯の隣に並んだ。

「手でも合わせようか？」

「それお寺とか神社でしょ。こんな祠でもするのかな？」

「さあ？でもまあいいじゃない」

祐樹に促され、唯も手を合わせ目を瞑った。心で願いを紡ぐ。願わくは祐樹と同じ願いを。

「さ、行こうか」

しばらくの後祐樹が動き出した。リュックを背負い、祠に背を向けた。そしてそつと手を差し出す。唯は頷き、祐樹の手を取った。小さかったあの頃とは逆だ、祐樹はそう思った。

『いろんな人に支えられた。その時は気付かないんだけどね。しゃがみ込んで空を眺めるだけの日々は卒業するべきだって、自分でもようやく理解できた。決別じゃなく整理。僕は前を向くことにするよ。君もきつとそれを望んでくれると思う。だから僕は今日橋を渡るよ。これが、優衣ちゃんが僕にくれる最後の道しるべだと思う。』

橋を渡りきって立ち止まった。唯と一緒に振り返る。ふと昔の光景が蘇ってきた。幼稚園の遠足のときの記憶だ。

神様がいなくても天使はいるかもしれないでしょ。あいさつしとこうかなって

あのとき僕がお辞儀をした天使は君だったのかな？祐樹は姿勢を正し、あの時のようにぺこりと頭を下げた。

「それも儀式の一連？何だか合わないね」

唯が隣でふふと笑いながら、祐樹に倣って頭を下げた。

『満月の度に空を見上げるんだ。今夜もあの橋は綺麗に照らされているのかなって。そこから月は見える？きつとこっちから見るとよりずっと綺麗なんだろうな。』

「なにぼーっとしてんだ？」

智弘の声にはっとする。窓外の景色から目を戻す。正面には智弘と響子、そして隼人が並んでいる。いつものファミレスだった。

だが今日はいつもとは違う。いや、今日からは、というべきか。

「得意の妄想の世界に浸ってたんでしょ」

祐樹の隣では唯が楽しそうに笑っている。

「まあ、ちょっとね。でもこうやって5人で集まると昔に戻った気がする」

「ちよつと尾藤君」

祐樹の言葉に敏感に反応し目くじらを立てる響子。

「まあまあ、いいじゃない。私も小林優衣さんの話聞きたいし」

唯がなだめる。しかし響子は腑に落ちないようで咎めるような目つきで祐樹を見ている。

「思い出もさ、」

「え？」

「想いも、思い出も、結局はその人を思うことだと思っただ。誰かを好きだったことはずっと忘れないし、そのときの気持ちも忘れることは出来ない。それは変わらないよ。でも今はちゃんと言葉に出来る」

「でも・・・」

「二人がいつてんならそれでいいんじゃないか？それより早く頼もうぜ、俺腹減ったよ」

「普通この場面でそんなこと言う？」

智弘と響子のやりとりに隼人は呆れ顔でため息をついた。隣を見ると唯がふふふと笑っている。目が合った。祐樹もつられて、ふふふと笑った。

・ ・ ・

「良君は綱ヶ背橋の伝説って知ってる？」

「綱ヶ背橋の？ああ、満月の夜に手を繋いでその橋を渡った二人は永遠に結ばれるとか」

女の子が首を振る。前髪が規則的に左右に揺れ、男の子はそれを可愛いと思った。

「違うよ、それはもう古いの」

「伝説に古いも新しいもないでしょ。っていうか新しい伝説ってそ



れ伝説じゃないでしょ」

「揚げ足を取らないの。私が言っているのは、綱ヶ背橋の天使の伝説」

「天使？」

「そ。あるときからあそこの祠に天使の縫いぐるみが置かれるようになったんだって。でね、お互いに宛てたラブレターをその天使に抱かせるの。そうすれば天使が永遠に二人の仲を繋いでいてくれるの」

「胡散臭いよ。だいたい元の伝説はどこ行っただのさ？」

男の子の言葉を遮るように、女の子は片手を突き出した。

「分かってないなあ。大事なのは気持ちなのよ」

「気持ちね。それで、なんで僕にその話を？」

「・・良君で相変わらず鈍いね。でもまあ、そこが良君らしくていいところなんだけどね」

女の子がふふふと笑う。男の子も「何だよ」と言いながらも、女の子につられてふふふと笑った。

・  
・  
・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8125/>

---

網ヶ背橋

2010年10月8日14時41分発行